

# 向中野幅遺跡

MUKAINAKANOHABA SITE

—第3・4次調査 盛岡市新産業等用地整備事業に伴う発掘調査報告書—

2019. 9

盛岡市・盛岡市教育委員会





# 向中野幅遺跡 発掘調査報告書

—第3・4次調査 盛岡市新産業等用地整備事業に伴う発掘調査報告書—

2019.9

盛岡市・盛岡市教育委員会



## 例 言

- 1 本書は、岩手県盛岡市向中野字幅、字畑返地内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地「向中野幅遺跡」における、盛岡市による「新産業等用地整備事業」（担当：商工観光部新産業拠点形成推進事務局）に伴い、文化財保護法に基づき、盛岡市教育委員会（歴史文化課遺跡の学び館）が実施した同遺跡第3・4次発掘調査の報告書である。
- 2 第3次調査は遺構確認試掘調査として、平成29（2017）年11月21日から同年12月6日に実施した。その結果、遺構遺物を確認した範囲の本発掘調査として第4次調査を平成30年（2018）7月9日から同年9月30日に実施した。
- 3 第3次調査（試掘調査）は、盛岡市教育委員会歴史文化課遺跡の学び館の文化財主査 神原雄一郎、佐々木亮二、文化財調査員 今松佑太が担当した。第4次調査（本調査）は、同文化財主査 今野公顕、文化財調査員 上柿 南が担当した。また、本書の執筆編集は今野公顕が担当し、上柿 南（第3章調査成果3遺構）が補佐した。
- 4 遺構平面位置は、周辺遺跡調査事例と整合性を図るため、世界測地系を日本測地系に変換し、平面直角座標X系を用いた調査座標で表示した。
  - ・調査座標原点 X-36,500 Y+27,000（日本測地系第X系）＝RX±0 RY±0（調査座標値）
- 5 遺構等の高さは、標高値をそのまま使用した。
- 6 土層断面図は、堆積の仕方を重視し、線の太さを使い分けた。層相観察には「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
- 7 本書で用いる遺構種別ごとの略号は、次のとおりとした。

遺構種別	土坑	溝跡
略号	R D	R G

- 8 本書で用いる遺構平面図の線種は、次のとおりとした。

区別	線種	
検出	実線	—————
推定	破線	-----
時期差	一点鎖線	- · - · - · - · - · - · -

- 9 古代の土器は、土師器・須恵器・あかやき土器に分類した。あかやき土器の名称は、回転台使用成形の酸化炎焼成土器に使用した。回転台使用成形で内面黒色処理がある酸化炎焼成の坏類は土師器に分類した。
- 10 出土遺物の写真撮影は、今野公顕が行った。
- 11 出土木製品及び火山灰の科学分析は、（株）加速器分析研究所に委託し、その結果を第4章に掲載した。
- 12 第1図は国土地理院長の承認を得て同院発行の五万分の一の地形図を複製した盛岡市管内図（承認番号 平17.東複第215号）を利用した。第2図は、岩手県の承認を得て岩手県所有の盛岡広域都市計画図（1/2500, 1/10000）を複製したものを使用した（承認番号 平成29年8月21日岩手県指令都第8-5号）。
- 13 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館にて保管している。
- 14 本書作成にあたり多大なる御協力を頂いた。記して感謝申し上げる。（敬称略）  
岩手県立図書館、もりおか歴史文化館、太田地区活動センター、大沼信忠
- 15 調査成果報告について、既報告のものより本書の内容が優先する。
- 16 向中野幅遺跡の既刊発掘調査報告書には、次のものがある。  
盛岡市教育委員会 2019年2月『向中野幅遺跡 -第1・2次発掘調査（仮称）盛岡学校給食センター建設に伴う発掘調査報告書-』

## 目次

第1章 経過	1
1 調査に至る経過	
2 発掘作業経過	
3 整理作業経過	
4 体制	
第2章 位置と環境	5
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
第3章 調査成果	10
1 調査の方法	
2 層序	
3 遺構	
4 遺物	
第4章 科学分析結果	32
1 木製品科学分析結果	
放射性炭素年代 (AMS 測定)	
樹種	
2 出土火山灰科学分析結果	
テフラ分析	
第5章 総括	39
1 調査のまとめ	
2 道明堤について	
写真図版	47
報告書抄録	
奥付	

## 表目次

第1表 向中野幅遺跡 調査実績	3
第2表 土坑 土層観察表	16
第3表 溝跡 土層観察表	17
第4表 出土遺物	30

## 図版目次

第1図 向中野幅遺跡位置図 (S = 1 : 100,000)	5
第2図 地形分類と主な遺跡の分布	7
第3図 向中野幅遺跡 全体図 (S = 1 : 3,000)	10
第4図 第4次調査 全体図 (S = 1 : 800)	11
第5図 RD01 ~ 06 土坑	18
第6図 北区 RG02 ~ 06 溝跡	19
第7図 中区(1) RG01・07 溝跡	20
第8図 中区(2) RG08 ~ 10 溝跡	21
第9図 中区(3) RG08・09 溝跡	22
第10図 中区(4) RG10 ~ 13 溝跡	23
第11図 南区(1) RG10・13・14・21 溝跡	24
第12図 南区(2) RG10・11・13・15・16・19・20 溝跡	25
第13図 南区(3) RG11・13・15・16・18 ~ 20 溝跡	26
第14図 南区(4) RG15 ~ 17 溝跡	27
第15図 RG01 ~ 10・13・14 溝跡 断面	28
第16図 RG11・13・15 ~ 21 溝跡 断面	29
第17図 出土遺物	31
第18図 第4次調査 遺構年代模式図	39

## 写真図版目次

第1図版 周辺航空写真	47
第2図版 第4次調査区全景 (オルソ画像)	48
第3図版 第4次調査区全景 (空撮)	49
第4図版 第4次調査 遺構(1)	50
第5図版 第4次調査 遺構(2)	51
第6図版 第4次調査 遺構(3)	52
第7図版 第4次調査 遺構(4), その他	53
第8図版 第4次調査 出土遺物	54

# 第1章 経 過

## 1 調査に至る経過

### (1) 盛岡南新都市開発整備事業（盛南開発）

盛岡南新都市開発整備事業は、盛岡市が北東北の拠点都市として担う都市機能の充実を図るため、既成市街地の南西部に新市街地を開発整備し、既成市街地から盛岡駅西口地区へと連結する新しい市街地として「軸状都心」を形成しようと、雫石川の南に位置する約313.5haを整備したものである。独立行政法人都市再生機構（旧地域振興整備公団）が事業主体となり、土地区画整理事業として実施され、平成6（1994）年に事業認可を受け着手し、平成25（2013）年までに換地処分がなされ事業が完了した。

当初、地域振興整備公団により策定された基本計画案は、都市開発区域面積約450ha、総事業費480億円を見込んだが、規模縮小を余儀なくされ、昭和62年に約320haを地域公団が整備し、残る130ha（道明地区等）は盛岡市と旧都南村が土地区画整理事業として実施することとなり、昭和63年に事業採択を受けた。これを受け、平成2（1990）年に岩手県、盛岡市、旧都南村が地域振興整備公団に事業申請を行い、翌平成3（1991）年12月に建設大臣及び国土庁長官から実施許可が下り、事業が開始された。

### (2) 道明地区土地区画整理事業

「盛岡南新都市開発整備事業」から除外されることとなった道明地区は、盛岡市の都市基盤づくりのひとつである「盛岡南地区都市開発整備事業」の一環として、都市計画道路等の整備をとおして良好な住環境形成を図る土地区画整理事業として実施されることとなった。平成16年2月に70.6haを対象にした事業認可を受け着手されたが、社会情勢の変化を受け見直しが図られ、平成28年3月の事業計画変更により施工面積21.7ha、総事業費56.2億円に縮小された。道明地区の区画整理事業は、盛岡南新都市開発整備事業区域側から順次施工されており、清算期間を含み平成40年度までの完了を目指している。除外区域は生活環境改善と土地利用促進を図るため、幹線道路整備、生活道路整備、河川改修、上下水道整備を実施することとなった。

### (3) 新産業等用地整備事業・学校給食センター整備事業

盛岡市では、市の工業振興ビジョン等において、食品関連、金属製品、情報サービス業の集積を目指した取組を行っている。また、盛岡市の平成27年度の企業意向調査結果では、産業等用地の最大需要面積が18.9haとなっている一方、未利用用地がほとんどない状況である。

盛岡市では、こうした需要に応え産業集積拠点整備に向け、道明地区区画整理事業外となった区域（準工業地域）を新産業等用地整備事業として整備することとし、平成29年度から用地測量や協議、文化財保護法に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地「向中野幅遺跡」における試掘調査を実施した。平成29年3月には「新産業等用地整備基本計画」を策定し、これに基づき平成30年度から商工観光部に新産業拠点形成推進事務局を設置し、本格的に事業開始した。

整備計画では、道明地区における事業全体面積を約14.5haとし、新産業等用地と共に「（仮称）盛岡学校給食センター」を区域内に整備し、平成38年度までに工事を完了させるとしている。

#### 【引用・参考文献】

盛岡市・盛岡市教育委員会 2018 『盛南地区遺跡群発掘調査報告書X - 道明地区土地区画整理事業関連遺跡平成20～26年度発掘調査 -』 遺跡の学び館

盛岡市 2017.3 「盛岡市新産業等用地整備基本計画」 商工観光部（盛岡市ウェブサイト）

## 2 発掘作業経過

盛岡市は、平成 28 年度に、道明地区区画整理事業区域に隣接する地域を対象に「新産業等用地整備事業」と「(仮称)盛岡学校給食センター建設」を計画した。

この計画地内に、古代の集落遺跡や江戸時代の水利施設「道明堤」跡と考えられてきた周知の埋蔵文化財包蔵地である向中野幅遺跡が所在することから、文化財保護法に基づき、盛岡市教育委員会遺跡の学び館が遺構確認の試掘調査を実施し、遺構が確認された範囲の本調査を行った。

### (1) (仮称)盛岡学校給食センター建設に伴う調査(第1次・第2次調査)

「(仮称)盛岡学校給食センター」用地は、平成 29(2017)年 4 月 6 日付けで、盛岡市長(担当:教育委員会学務教職員課)から発掘通知が提出された。これを受け、盛岡市教育委員会遺跡の学び館では、計画地 11,078㎡を対象に、同年 4 月 19～28 日にトレンチ(試掘溝)による試掘調査(第1次調査)を実施した。

この結果、一部に縄文時代の土器や古代以降の溝跡などを確認したことや、計画地内に江戸時代の道明堤の築堤跡と言えられてきた土手状の高まりが残存していることから、第2次調査として、第1次調査にて遺構遺物が確認された 743.8㎡を対象に、同年 11 月 1～30 日に発掘調査を実施した。この第2次調査の結果、江戸時代の「道明堤」の一部と考えられていた土手状の高まりは、近代以降の盛土が大部分を占めていることを確認した。併せて、重複する河道跡を検出した。これは豊富な湧水を伴い植物遺存体が堆積する層を形成しており、それに取り残された微高地から、縄文時代の土器や石器が出土した。

調査成果は、『向中野幅遺跡 - 第1・2次調査(仮称)盛岡学校給食センター建設に伴う発掘調査報告書 -』(盛岡市教育委員会 2019 年)として報告した。

### (2) 新産業等用地整備に伴う試掘調査(第3次調査)

新産業等用地整備事業計画地について、平成 29 年 11 月 10 日付けで盛岡市長(担当:都市整備部盛岡南整備課, 商工観光部ものづくり推進課)から発掘通知が提出された。これに基づき、向中野幅遺跡に該当する 24,848㎡を対象として、同年 11 月 21～12 月 6 日にトレンチによる遺構確認の試掘調査を実施した(第3次調査)。この結果、古代以降の溝跡などを確認した 14,326㎡を、要本調査範囲として報告した。

協議の結果、翌平成 30 年度に本調査を実施することになった。

### (3) 本調査(第4次調査)

平成 30(2018)年 6 月 1 日付けで盛岡市長(担当:新産業拠点形成推進事務局)から、第3次調査にて要本調査範囲とした 14,545㎡を対象に発掘通知が提出され、本調査を同年 7 月 9 日～9 月 28 日に実施した。

作業効率を上げるため、第3次調査で確認しきれなかった範囲の遺構確認を行いつつ表土除去作業を進め、遺構の確認されない範囲を残土置き場とし、10,846.5㎡(北区 1069.5㎡, 中区 4732.5㎡, 南区 5044.5㎡)を対象として本調査を実施した。

水路に囲まれた場所であるとともに、湧水もあり、ひとたび雨が降ると調査区の大半が水没した。その都度、揚水ポンプで排水しながらの作業となった。

また、今次調査区は線路隣接地であることから、「無人航空機飛行標準マニュアル」(国土交通省 平成 30 年 2 月 1 日版)、「公共測量における UAV の使用に関する安全基準(案)」(国土地理院 平成 28 年 3 月 30 日)、「測量調査に供する小型無人航空機を安全に運航するための手引き」(日本写真測量学会 2015 年 5 月 25 日)等に従い、空中写真撮影を実施した。受注業者が UAV ドローン飛行の電波状況等の安全を確認の上、東日本旅客鉄道株式会社(JR 東日本)盛岡支社と協議をし、盛岡市遺跡の学び館から JR 東日本へ作業通知を提出し、実施した。



以下、平成30年（2018年）度の発掘現場作業の経過を記す。

- 7月9日～24日 表土除去等業務委託の実施（樋下建設株式会社）。  
バックホウ法面バケツ付0.7m<sup>3</sup>、クローラードンプ11tによる表土除去作業。  
併せて調査区内のゴミ、残留物の撤去、器材置き場や作業員駐車場用地の整地作業を実施。
- 7月12日 コンテナハウス、仮設トイレ賃貸借（株式会社備品レンタルセンター）。
- 7月17日～ 現場器材等搬入、テント設営。現場周囲草刈り、揚水ポンプによる調査区内の排水作業。
- 7月23日～ 南区から作業員による遺構検出作業に着手。  
周囲水路からの漏水を揚水ポンプによる排水作業。周辺水路の草刈りや清掃を実施。
- 7月26日 区画整理のための測量成果をもとに測量し、調査区内に杭を設置（基準点、水準点測量）。
- 7月31日～ 南区の遺構の検出作業、精査、平面図や断面図の実測、写真撮影等に着手。  
以後、雨が降るたびに調査区の大半が水没し、その都度、揚水ポンプ等で排水作業。
- 8月24日～ 中区の遺構の検出作業、精査、平面図や断面図の実測、写真撮影等に着手。
- 9月13日～ 北区の遺構の検出作業、精査、平面図や断面図の実測、写真撮影等に着手。
- 9月18日～ 空中写真撮影に向け調査区内のクリーニング作業着手。
- 9月20日 空中写真撮影及びオルソデータ作成業務委託（株式会社タックエンジニアリング）。  
ドローンUAV電波状況等確認。東日本旅客鉄道株式会社盛岡支社に作業通知を提出。
- 9月21日 空中写真撮影完了。
- 9月21～27日 遺構の平面図や断面図の実測、写真撮影等作業。
- 9月28日 現場撤収作業、器材搬出等完了。
- 10月5日 コンテナハウス、仮設トイレ撤去。
- 11月21日 空中写真及びオルソ画像データ納品。

### 3 整理作業経過

平成30年12月から、現場図面及び出土資料の整理など調査のまとめ作業に着手した。現場図面（第1原図）を整理し、第2原図を作成し、それをもとに本書掲載図作成を行った。出土遺物は、現場作業期間中の雨天時等に洗浄した。それを出土地点及び器種等ごとに分別し、台帳登録を行い、図化できるものは実測図化、写真撮影、拓本を採った。

また、RG02溝跡埋土から採取した火山灰土の科学分析と、調査区南区から出土した木製品（下駄）の樹種同定及びAMS年代測定と保存処理を、平成31年4月19日から同年9月28日まで業務委託により実施し、本書にその結果を掲載した（株式会社加速器分析研究所）。

第1表 向中野幅遺跡 調査実績

遺跡名	略号	次数	年度	調査方法	所在地	面積(m <sup>2</sup> ) (調査対象)	調査期間	遺構・遺物	調査原因	調査	報告書
向中野幅	OMH	1	H29	試掘確認	向中野字幅、字畑返 岩手県盛岡市	819.0 (11,078)	2017.4.19 ～2017.4.28	縄文時代 近代以降	(仮称) 盛岡学校 給食センター 建設	盛岡市 教育委員会	既刊
		2	H29	本調査		743.8 (11,078)	2017.11.1 ～2017.11.30	縄文時代 近世以降			
		3	H29	試掘確認		2,568.0 (24,848)	2017.11.21 ～2017.12.6	縄文時代 平安時代以降	盛岡市 新産業等 用地整備事業		本書
		4	H30	本調査		10,846.5 (14,545)	2018.7.9 ～2018.9.28	平安時代 近世以降			

#### 4 体制（平成30年度、令和元年度）

事業者 盛岡市 盛岡市長 谷藤裕明（担当：盛岡市新産業拠点形成推進事務局）

調査主体 盛岡市教育委員会 教育長 千葉仁一

教育部長 豊岡勝敏

教育次長 大倉慎澄（30年度）、大澤 浩（元年度）

事務局 盛岡市教育委員会事務局 歴史文化課

歴史文化課長 兼 遺跡の学び館長 杉本 浩（30年度）、福田 淳（元年度）

調査 盛岡市教育委員会事務局 歴史文化課 埋蔵文化財担当・遺跡の学び館

課長補佐 兼 館長補佐 多田秀明（30年度）、三浦志麻（元年度）

文化財副主幹 室野秀文、菊地幸裕

文化財主査 津嶋知弘、今野公顕、花井正香、佐々木亮二

主任 菊池好文（元年度）

文化財主事 鈴木俊輝

文化財調査員 今松佑太

文化財調査員 上柿 南（30年度）、佐々木あゆみ（元年度）

文化財調査員 樋下理沙（30年度）、金 俊教（元年度）

学芸調査員 千葉貴子

学芸調査員 新井 順（30年度）、砂子美佳（元年度）

調査担当 第3次調査（平成29年度・試掘調査） 神原雄一郎、佐々木亮二、今松佑太

第4次調査（平成30年度・本発掘調査） 今野公顕、上柿 南

報告書執筆編集 今野公顕、上柿 南（平成30年度）

発掘調査・整理作業 作業員

第4次調査 秋元理恵、天沼芳子、伊藤敬子、岩根陽子、上田公一、及川亜矢子、及川京子、大川啓貴、折原エツ子、川村久美子、久慈玲子、工藤エキ、小松愛子、齋藤義文、佐々木あゆみ、佐藤政幸、佐藤美智子、佐野光代、高橋弘子、千葉智子、西川君子、西田千佳、袴田英治、樋口泰子、細田幸美、村上幸子、村上美香、山下摩由美、山田聖子

委託業務、賃貸借受注者

- ・表土除去等業務委託 樋下建設株式会社
- ・仮設トイレ等賃貸借 株式会社備品レンタルセンター
- ・空中写真撮影及びオルソデータ作成業務委託 株式会社タックエンジニアリング
- ・科学分析等業務委託 株式会社加速器分析研究所



## 第2章 位置と環境

### 1 地理的環境

#### (1) 位置 (第1図)

本遺跡は、岩手県盛岡市向中野字幅・畑返地内に所在する。

盛岡市は、岩手県の内陸部中央北寄りに位置する県庁所在地である。平成4年に南に隣接する都南村と、平成18年に北に隣接する玉山村と合併し、平成20年には中核市の指定を受けた。人口は293,861人(平成30年11月1日現在・平成27年国勢調査人口確報値に基づく推計人口)、面積は886.47km<sup>2</sup>である。

盛岡市は、東の北上山地と西の奥羽山脈の間を南へ流れる北上川が作り出す北上盆地の北端に位置する。

本遺跡は北上川とその支流である雫石川、中津川、築川の合流点付近から南に約2.6kmの位置にあり、北上川は遺跡の東約1.5kmを南流している。

遺跡周辺は、かつては田畑が広がる平野に集落が散在する農村地帯であった。本遺跡は、大規模な土地区画整理事業「盛岡南新都市開発整備(盛南開発)区域」、及びそれと連続施工されている「道明地区土地区画整理事業区域」の南東に位置する。遺跡東側にはJR東北新幹線及び東北本線が南北に走る。東北本線仙北町駅から南方約1.8km、同岩手飯岡駅から北方約2kmに位置する。



第1図 向中野幅遺跡位置図 (S = 1/100,000)

## (2) 地形・地質 (第2図)

盛岡市は、東北地方太平洋側の北上山地と奥羽山脈の間を南に貫流する北上川によって形成された北上盆地の北端に位置する。北上川は岩手県北部の岩手町を水源地とし、宮城県石巻市で太平洋に注ぐまで、南流するうちに多くの河川と合流し水量を増していく。北上川に合流する最初の大きな河川である雫石川と、北上山地から西流する中津川が、盛岡市域で合流することによって、それ以南には幅広い平野部を形成する。雫石川は奥羽山脈から東進し雫石盆地を形成するが、鳥泊山と箱ヶ森に挟まれた北の浦付近（市内上太田）で急激に流路をせばめられ、その狭窄部を抜けて北上盆地に入り、北上川と合流する。狭窄部以西は多くの急流小河川をあわせ雫石川水系を形成し、水量を豊かにして狭窄部につきあたる。その勢いで狭窄部付近に土砂の沈下堆積が生じ狭窄部以東の平坦な地形と合わせ、流路転換の原因となっている。この流路転換は、現雫石川の南岸で行われ、北岸はほとんど雫石川の河道になっていない。これは北岸に岩手山を供給源とする火山砕流堆積物と火山灰層をのせる台地が発達していることによる。

狭窄部以東の南岸は、雫石川の旧河道が幾筋も認められ、沖積段丘（砂礫段丘）が発達する。沖積段丘は水成砂礫層を基底に、その上に水成シルト、表土が覆う。砂礫層の上面高やシルトの層厚や層相は一様ではなく、地点によって様相が大きく異なる。シルト層内に腐植土（あるいは火山灰か）を介在する地点もあり、長期にわたる堆積とみられる。またこのシルトは旧河道ばかりでなく、微高地などにも堆積している。

雫石川の旧河道は、連続する大きなものが4条あり、そのほか細かな網状のものが多くみられる。大きな旧河道の南岸には比高差の小さい河岸段丘が形成されており、南から現河道に向かって低くなっており、河道が北進したことを示し、網状の細かな旧河道は複雑な河道の変遷を示していると考えられる。

よって、沖積段丘は雫石川が周辺山地から供給する砂礫やシルトによって堆積され、さらに河道の定まらない雫石川による下刻や堆積がくり返されたものと言え、常に河川の影響を受けた不安定な地形であったと言える。この段丘面上には、本遺跡をはじめとした多くの奈良・平安時代以降の遺跡が分布し、水成シルトが平安時代前半の竪穴建物跡を埋没させている例もある。

これまでの盛南地区周辺の発掘調査から、各遺跡は雫石川と北上川の影響を強く受けた不安定な低位沖積段丘上にあり、水成砂礫層が基底をなしている。その上に河川堆積による水成シルト層が乗り、表土がそれらを覆っている。基本層は概ね3層に分けられ、各地点に大略この3層が観察されるものの、砂礫層の上面高は一定しておらず、層厚や層相も地点によって異なっている。しかも隣接する地点で大きく相違することもある。Ⅱ層は地点によって薄い遺物包含層を形成していることもあり、縄文時代の遺物がまれに出土する。網目状に確認される旧河道は、Ⅲ層上面に水成堆積の黒色土が厚く堆積し、その下層にグライ層が形成されることもある。雫石川と北上川の氾濫の影響を受け、Ⅱ層の一部に砂層が形成されている場合もある。

遺跡の標高は約 119.5 ～ 120.8m を測り、遺跡の総面積は約 57,300㎡と想定される。

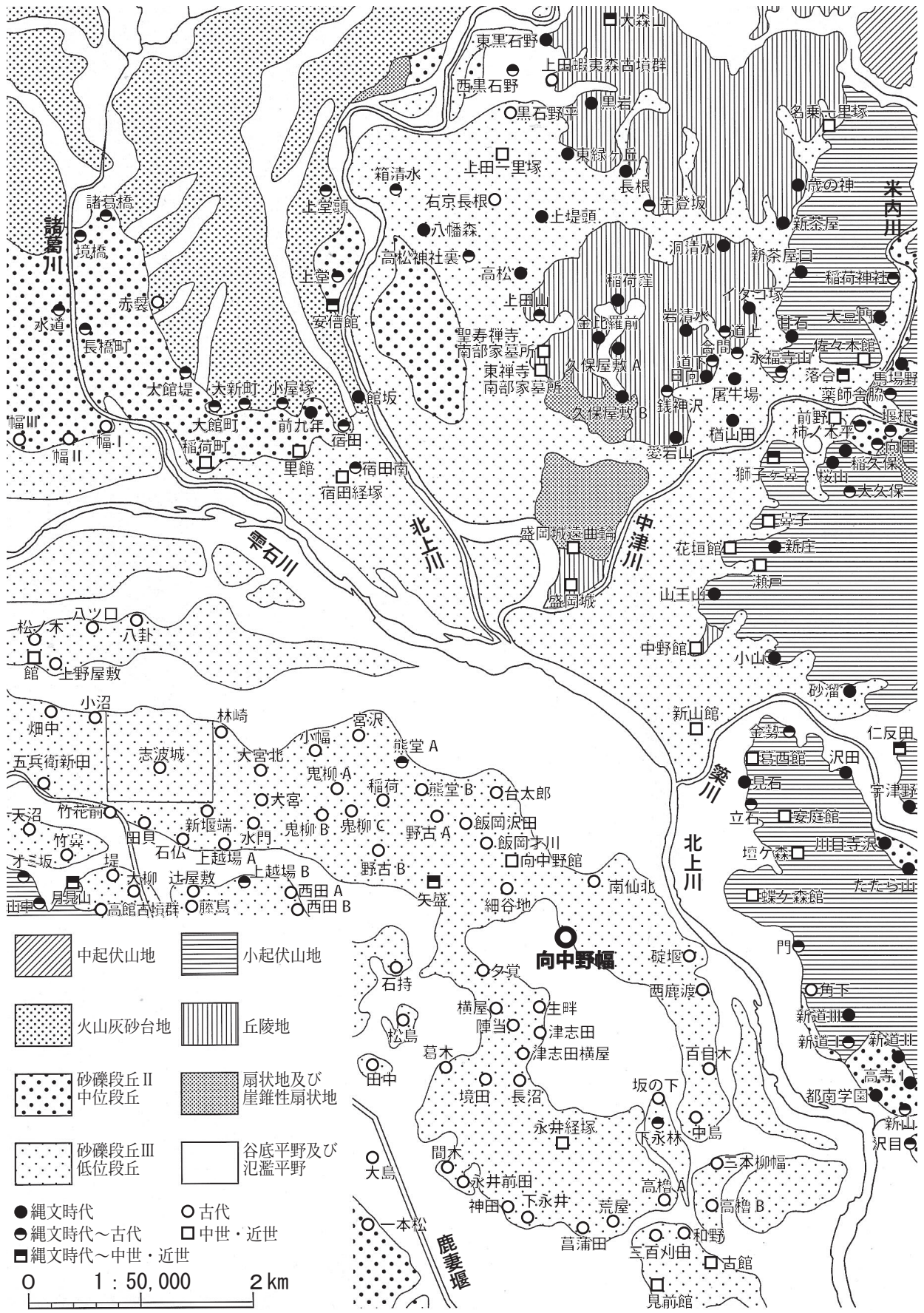
## (3) 景観

本遺跡周辺からは、北に岩手山と姫神山、北遠方に七時雨山、西に秋田駒ヶ岳、南東に早池峰山を望む。

周辺はほぼ平坦な田畑が広がり、集落が点在する。昭和 30 年代から 50 年代にかけ、大規模な県営圃場整備事業が実施された。

遺跡の東部は、南北に走る JR 東北新幹線及び東北本線と隣接する。この線路の東は、宅地化が進行している地域である。南は圃場整備された水田と小規模な集落が点在する。北と西は、盛岡南新都市開発整備や道明地区土地区画整理事業の区域に近接し、国道 46 号線盛岡西バイパスをはじめ商業区域や住宅地が整備され、近年様相が大きく変容した。





第2図 地形分類と主な遺跡の分布

#### (4) 周辺の遺跡

本遺跡は、雫石川の流路変換によって形成された沖積段丘に立地する。雫石川の北の浦狭窄地以降の南側と北上川の西側は、網目状に入り込む旧河道に画された微高地上に主に古代以降の遺跡が分布する。

代表として、延暦 22 (803) 年に古代律令政府によって造営された古代陸奥国最北端の城柵志波城跡が所在し、これより南東の地域に盛南地区遺跡群がある。これは「盛岡南新都市開発整備事業 (盛岡南新都市土地区画整理事業)」区域 (313.5ha, 平成 25 年完了) に所在する 17 遺跡 (大宮北遺跡, 小幡遺跡, 宮沢遺跡, 鬼柳 A 遺跡, 稲荷遺跡, 本宮熊堂 A 遺跡, 本宮熊堂 B 遺跡, 野古 A 遺跡, 飯岡沢田遺跡, 飯岡才川遺跡, 台太郎遺跡, 向中野館遺跡, 細谷地遺跡, 矢盛遺跡, 焼野遺跡, 夕覚遺跡, 南仙北遺跡) と、その南東に隣接する「道明地区土地区画整理事業」の当初区域 (70.6ha, 平成 15 年事業開始, 継続中) に所在する 3 遺跡 (細谷地遺跡, 夕覚遺跡 (以上 2 遺跡は盛岡南新都市開発区域から連続), 向中野幅遺跡) の総称である。

各遺跡は、沖積段丘の微高地に位置し、各遺跡は細かい旧河道によって画されており、主に古代以降の集落遺跡である。

## 2 歴史的環境

本遺跡群の立地する沖積段丘上には、縄文時代～古墳時代の遺構遺物の発見は少ない。遺跡の多くは 7 世紀中葉以降の古代の集落遺跡であり、中近世以降の居館跡, 集落跡, 墓域などがみられる。

縄文時代の遺構遺物は、本宮熊堂 A 遺跡や台太郎遺跡において、晩期を中心とする竪穴建物跡や遺物包含層が確認されている。また、詳細な時期は不明だが、飯岡才川遺跡, 細谷地遺跡, 矢盛遺跡などで、陥し穴がまともって確認されている。旧河道沿いに多く確認されている。

弥生時代の遺構遺物は、弥生時代前期頃の土器埋設遺構が台太郎遺跡で確認されているほか、弥生時代後期の土器片や北海道系の続縄文土器片が台太郎遺跡や細谷地遺跡から、わずかに出土している。

古墳時代の遺構遺物はほとんど出土例がなく不明だが、7 世紀中葉以降の遺構遺物は台太郎遺跡において確認されており、これ以降現代に至るまで農村集落が継続して営まれている。平野部における水田稲作などの、農耕を主体とした暮らしが安定的に営まれてきた土地といえる。

奈良時代, 8 世紀中葉以降, 竪穴建物を主体とした集落遺跡が増加する。この時期の集落は、大型竪穴建物跡を中心に、中～小型の竪穴建物跡が数棟ずつまともって分布することが多く、血縁関係を持った一族が集落を構成したものと考えられる。この時期, 律令政府は東北地方に住んだ人々を「蝦夷 (エミシ)」と呼んだ。政府は東北地方へ勢力を拡大する政策をとっており、「城柵」と呼ばれる官衙を拠点として、関東地方などから移民 (柵戸) を送り込む同化政策をとっていたと考えられる。この過程で、政府は蝦夷と激しく争ったり、饗給などをとおして懐柔し、政府組織へ取り込んだりしていったことが、文献史料に記録されている。

文献史料によれば、8 世紀後半の盛岡周辺は「志波村」と呼ばれていたと考えられ、出羽国の政府軍と戦っていた。しかし 9 世紀初頭には、志波村の蝦夷は律令政府側についた。この頃, 政府軍を破った胆沢 (岩手県奥州市付近) の蝦夷アテルイは、胆沢城を造営した征夷大將軍坂上田村麻呂に降伏した (延暦 21 (802) 年)。その翌年, 延暦 22 (803) 年, 坂上田村麻呂によって、本遺跡の約 4 km 西方に、志波城 (盛岡市下太田方八丁ほか) が造営された。

志波城は、奈良・平安時代, 東北地方に造成された「城柵」のひとつである。志波城は発掘調査成果などから、古代陸奥国最北に位置し、最大規模の城柵であった。城柵とは、古代の政府が東北地方に造営した官衙の一種である。古代日本の律令制度に基づく国家形成は、天皇を中心とした政府が、全国の土地・人民を直接統治した中央集権体制であったが、当初東北地方北部にはその勢力が及んでおらず、土地と人々は政府統治範囲外であり、人々は「蝦夷」(エミシ) と呼ばれた。城柵は、蝦夷に対し酒宴を伴う儀式でもてなし懐柔する饗給, 蝦夷の動向を探る斥候, 反抗する蝦夷を武力で制圧する征討などの機能を担い、蝦夷に対し天皇の威厳を示す、政府



の対蝦夷政策の軍事と行政の拠点だった。

志波城は、その北を流れる雫石川の度重なる氾濫被害と、桓武天皇の徳政相論の結果を受けた行財政改革により、造営後約 10 年で南約 10km に徳丹城（岩手県矢巾町）を造営し機能と規模を縮小し移転し、9 世紀半ばまでは、岩手県域は胆沢城一城による統治体制へと再編されたと考えられる。

徳丹城が廃絶され胆沢城一城体制となる 9 世紀半ばから、律令政府は直接統治から在地蝦夷勢力を生かした間接統治へ移行したと考えられ、その時期以降、本地域には竪穴建物を中心とした集落が平野部を中心に拡大してくる。竪穴建物の規模の大小差は縮小、均質化し、重複するものやカマドの作り替えが多くみられるようになる。また、向中野館遺跡で発見された水辺祭祀跡や、9 世紀半ば以降の飯岡沢田遺跡、飯岡才川遺跡の円形周溝墓（末期古墳）群と火葬骨を埋納した骨蔵器など、集落だけではない機能も見られるようになる。

また、9 世紀後葉から 10 世紀中葉にかけて、各遺跡においては、カマドを何度も作り変える大型の竪穴建物を擁する拠点的な集落が発生する。飯岡才川遺跡では、微高地の南斜面に沿うように総柱の掘立柱建物が東西に並立し、倉庫群が存在したと考えられる。大宮北遺跡や志波城跡の東側に隣接する林崎遺跡、盛南地区の細谷地遺跡などでは、官衙的な掘立柱建物跡が計画的に配置された集落が発生したり、仏教祭祀的な遺物の出土や坏をまとめて廃棄した土坑が確認されたりしており、宗教的な祭祀も司った在地有力者の拠点が形成されていたと考えられる。

岩手県域においては、10 世紀後半には、古代城柵の統治範囲を受け継いだ在地有力者の中から、胆沢城の統治を基盤とした安倍氏が衣川以北の奥六郡を制した。やがて源氏や清原氏との前九年・後三年合戦を経て、11～12 世紀にかけては、北東北は平泉藤原氏の統治の時代となった。

11～12 世紀にかけての本地域の様相ははっきりしないが、大宮遺跡からは古代末の 12 世紀末から 13 世紀初頭頃のかかわりが、大量に溝跡に廃棄されて出土し、在地勢力の拠点が営まれていた可能性がある。

中世の 13 世紀後半には、台太郎遺跡において不整五角形の堀を巡らす居館が営まれ、周辺には土壇墓群や宗教施設と考えられる遺構も確認されており、出土遺物から 15 世紀頃まで在地領主が存在したと考えられる。また、向中野館遺跡や矢盛遺跡でも、16 世紀を中心とする掘立柱建物跡や堀跡が確認されており、在地領主の居館跡が存在したと考えられる。室町時代から戦国時代は、斯波氏と南下してくる南部氏の衝突が激しく、市内各地に城館が営まれた。

その戦いは南部氏が制した。南部氏は盛岡城を築城し、現在の盛岡の町並みの礎を整備した。本遺跡の東には奥州道中（街道）や仙北組町などが整備され、本地域は農地に集落が点在する農村地帯となる。各遺跡からは曲屋などの掘立柱建物跡や井戸跡、南仙北遺跡からは道路側溝跡が確認されている。幕末から近世初頭の古絵図には、その様子が記されている。そしてその景観は、昭和初期まで大きく変わることはなかった。

この地域の様相が現在の姿に変容するのは、第 2 次世界大戦後の昭和 30 年代に実施された圃場整備や、周辺の宅地開発、道路整備、東北新幹線の開通、そして平成に入って盛南開発（盛岡南新都市開発）が進められたことによる。

#### 【参考文献】

- 盛岡市・盛岡市教育委員会 各年度『盛南地区遺跡群発掘調査報告書 I～XI』盛岡市遺跡の学び館
- 盛岡市遺跡の学び館 2004 『城柵と蝦夷 古代陸奥国最前線』第 1 回企画展展示図録
- 盛岡市遺跡の学び館 2006 『黄泉への入口 古代蝦夷首長の墓』第 3 回企画展展示図録
- 盛岡市遺跡の学び館 2007 『まちづくりと考古学 - 盛南開発と遺跡発掘調査 -』第 6 回企画展展示図録
- 盛岡市教育委員会編 2016 『志波城跡と蝦夷（エミシ）』盛岡市文化財シリーズ第 43 集
- 盛岡市遺跡の学び館 2017 『“志波城前夜”の蝦夷社会 - 9 世紀初頭以前の盛南地区 -』第 15 回企画展展示図録

# 第3章 調査成果

## 1 調査の方法 (第3図)

### (1) 第3次調査

遺跡東部に位置する全面 24,848㎡に対し、遺構密度や遺構検出面までの表土の厚さなどを確認するため、試掘溝（トレンチ）を設定し法面バケット付バックホウで部分的に表土を除去する試掘調査を実施した。隣接地である第1・2次調査（(仮称)盛岡学校給食センター建設用地）において、溝跡や遺物包含層が確認されていたため、同様の様相が予想された。

### (2) 第4次調査

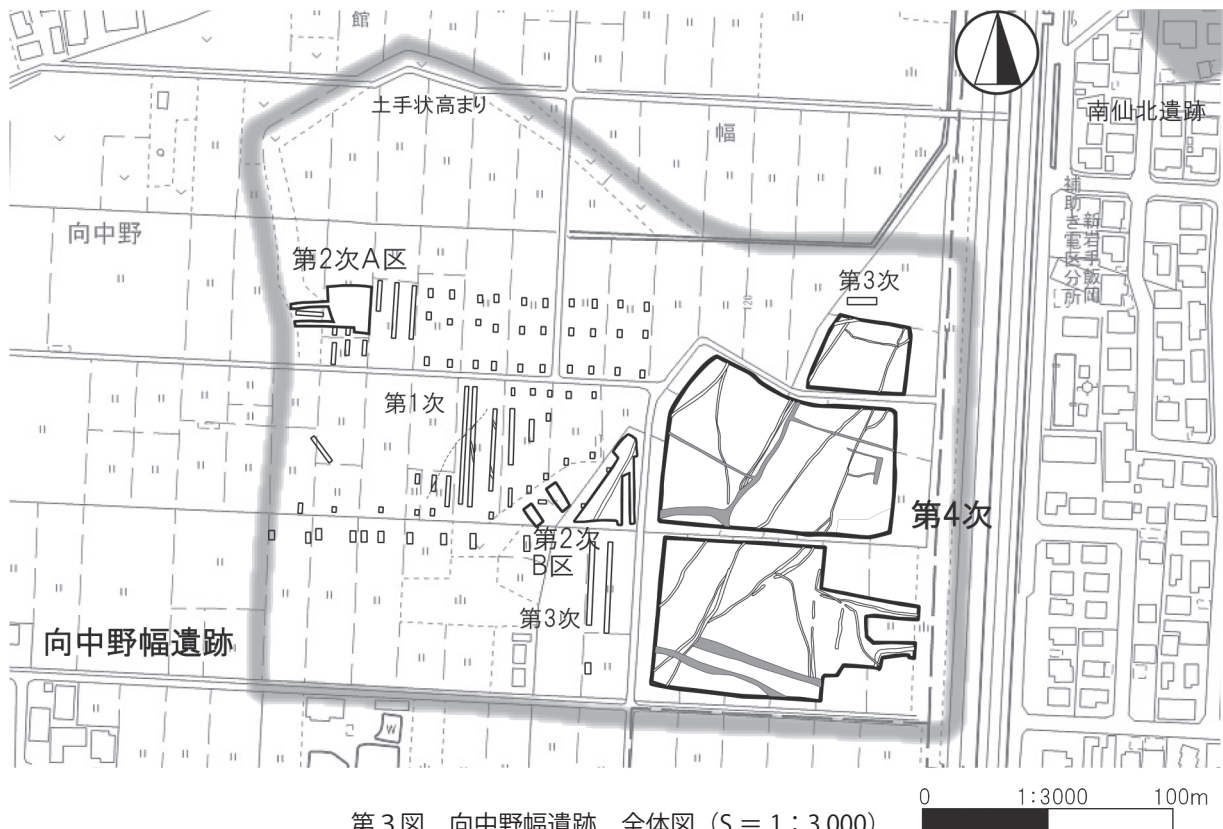
第3次調査の試掘調査結果を受け、14,545㎡を対象とした要調査範囲における本発掘調査を実施した。第3次調査において全面に溝跡を確認していたが、遺構が確認されない範囲も含まれていたことから、本調査範囲を10,846.5㎡に縮小し、残土置き場とした。調査区は道路と水路によって、北区 1,069.5㎡、中区 4,732.5㎡、南区 5,041.5㎡に分断される。

遺構検出面の標高は 120.0m 前後でほぼ平坦であり、北西から南東にかけて緩やかに傾斜する。

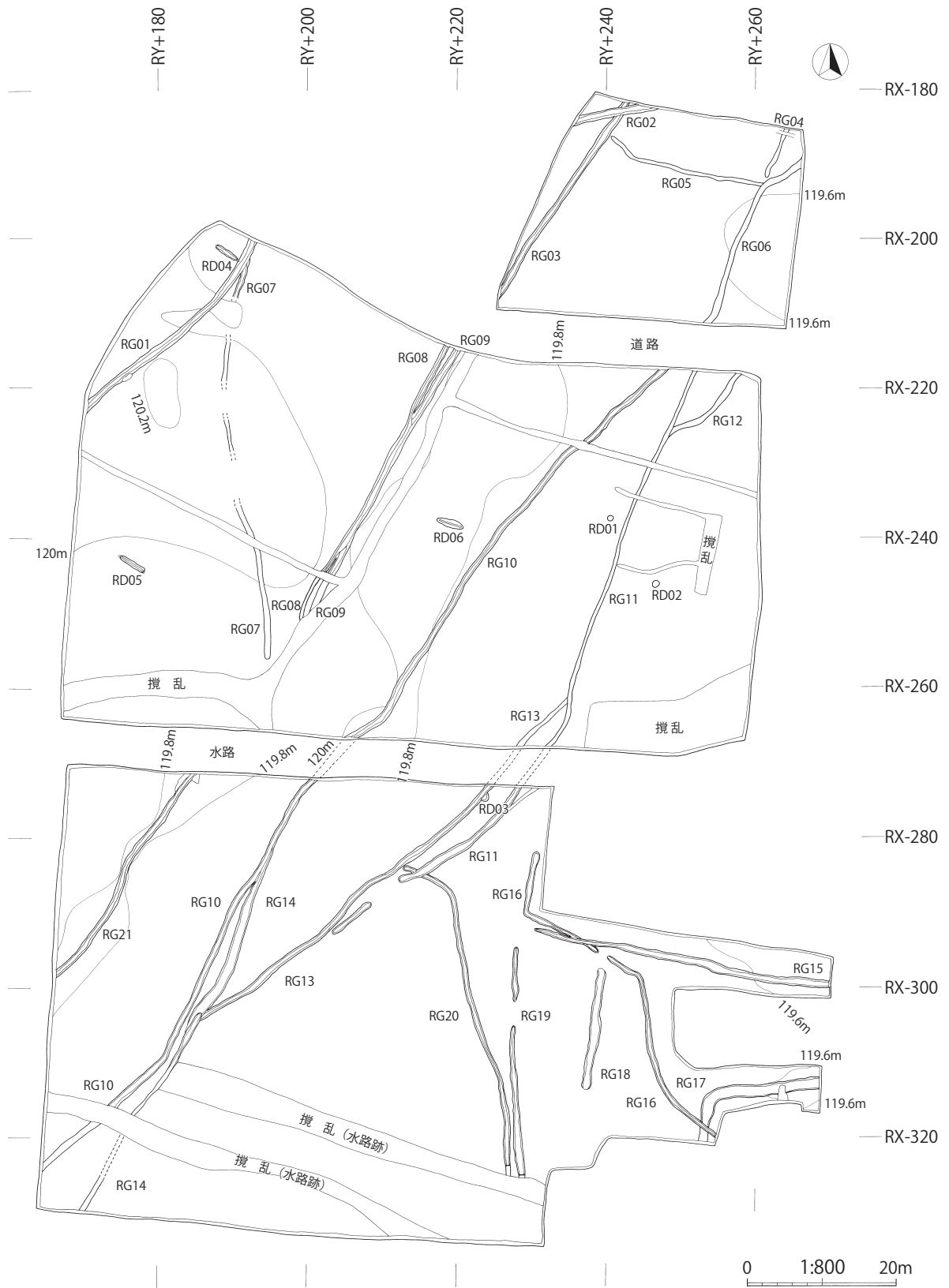
## 2 層序

本遺跡は雫石川と北上川の影響を強く受けた不安定な低位沖積段丘上にあり、水成砂礫層（Ⅲ層）が基底をなしている。その上に水成シルト層（Ⅱ層）が乗り、表土（Ⅰ層）がそれらを覆っている。基本層は概ねこの3層に分けられる。今次調査区は、河川堆積による褐色シルト層（Ⅱ層）が厚く堆積しており、遺構検出作業は表土（Ⅰ層）直下にて行った。

- Ⅰ層(表土) 腐植土や黒色火山灰からなる表土。黒～黒褐色を呈し、耕作土からシルト漸移層までを包括する。
- Ⅱ層(シルト層) 水成シルト層で、暗褐～褐色を呈する。このシルト層中に黒～黒褐色土層が介在することもある。地点により層相や層厚は一定していない。
- Ⅲ層(砂礫層) 基底をなす水成砂礫層で、砂の精粗、礫の量や大きさで、数層に細分される。



第3図 向中野幅遺跡 全体図 (S = 1 : 3,000)



第4図 第4次調査 全体図 (1:800)

### 3 遺構

#### (1) 第3次調査 (第3図)

トレンチ調査の結果、平安時代以降の溝跡 24 条、江戸時代以降の小柱穴（ピット）14 口を確認した。対象範囲のうち約 10,520㎡は、表土耕作土直下にグライ層や砂礫層が形成されており、遺構・遺物が確認されなかったことから、本調査（第4次調査）の対象外とした。

#### (2) 第4次調査 (第4図, 第2・3図版)

第4次調査区は、遺跡の南東に位置する。遺跡のほぼ 1/3 の範囲であり、新産業等用地整備事業に伴う本調査として実施した。調査の結果、縄文時代以降の土坑 3 基、平安時代以降の土坑 3 基、平安時代以降の溝跡 21 条を検出した。第3次調査で小柱穴（ピット）と考えられたものは耕作痕であったこと、溝跡は連続するものが含まれたことが判明した。

#### (3) 第4次調査検出遺構 (第2・3表, 第5～16図, 第4～7図版)

##### ① 土坑

##### RD01 土坑 (第2表, 第5図, 第4図版)

位置 中区中央 重複関係 なし 平面形 円形  
規模等 長軸 0.80m, 短軸 0.79m, 検出面からの深さ 0.18m。  
埋土 A1, A2 層 出土遺物 なし 時期 古代以降

##### RD02 土坑 (第2表, 第5図, 第4図版)

位置 中区東 重複関係 なし 平面形 円形  
規模等 長軸 0.75m, 短軸 0.60m, 検出面からの深さ 0.92m。  
埋土 A1, B1, B2, C1, D1 層 出土遺物 なし 時期 古代以降

##### RD03 土坑 (第2表, 第5図, 第4図版)

位置 南区北 重複関係 RG13 溝跡と重複し, 古い。 平面形 円形  
規模等 長軸 0.95m, 短軸 0.75m, 検出面からの深さ 0.60m。  
埋土 A1, A2, A3 層。A3 層から湧水。 出土遺物 なし 時期 古代以降

##### RD04 土坑 (第2表, 第5図, 第4図版)

位置 中区北西 重複関係 なし 平面形 溝状 (N55°W)  
規模等 長軸 3.75m, 短軸 1.10m, 検出面からの深さ 1.00m。  
埋土 A1～A3, B1～B3, C1～C4 層 出土遺物 なし 時期 縄文時代以降

##### RD05 土坑 (第2表, 第5図, 第4図版)

位置 中区西 重複関係 なし 平面形 溝状 (N59°W)  
規模等 長軸 3.65m, 短軸 0.65m, 検出面からの深さ 0.78m。  
埋土 A1～A3, B1～B4, C1～C3 層。C3 層から湧水。 出土遺物 なし 時期 縄文時代以降



RD06 土坑（第2表，第5図，第6図版）

位置 中区中央 重複関係 なし 平面形 溝状 (N74°W)

規模等 長軸 3.70m，短軸 0.79m，検出面からの深さ 1.12m。

埋土 A1, A2, B1 ~ B5, C1 ~ C5 層。C5 層から湧水あり。 出土遺物 なし 時期 縄文時代以降

② 溝跡

RG01 溝跡（第3表，第7・15図，第5図版）

位置 中区北西（第2次調査区へ連続） 重複関係 RG07 溝跡と重複し，新しい。

規模等 幅 0.78m ~ 1.22m，延長約 31.6m 以上（調査区外），検出面からの深さ 0.37m。

断面は逆台形状。 走向 北東~南西 埋土 A1 ~ A4 層。A4 層に僅かに酸化鉄を含む。

出土遺物 なし 時期 近世以降（第2次調査成果より）

RG02 溝跡（第3表，第6・15・17図，第5図版）

位置 北区北西 重複関係 RG03 溝跡と重複し，新しい。

規模等 幅 1.0m ~ 1.2m，延長約 10.8m 以上（調査区外），検出面からの深さ 0.36m。

断面は逆台形状~皿状。 走向 北東~南西

埋土 A, B1 ~ B3, C1 層。B 層に灰白色粉状パミスが混じる。粉状パミスは科学分析の結果，十和田 a 火山灰 (To-a, 915 年頃降下) と考えられる（第4章参照）。

出土遺物 B ~ C 層から土師器，あかやき土器，須恵器片出土。 時期 古代（平安時代）

RG03 溝跡（第3表，第6・15図・第5図版）

位置 北区西 重複関係 RG02 溝跡と重複し，古い。

規模等 幅 0.6m ~ 1.4m，延長約 31.3m 以上（調査区外），検出面からの深さ 0.22m。断面は皿状。

走向 北~南西 埋土 A1, A2 層 出土遺物 なし 時期 古代

RG04 溝跡（第6図・第5図版）

位置 北区北東 重複関係 なし 規模等 幅 0.4m ~ 0.6m，延長 7.1m 以上（調査区外）。

走向 北~南西 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG05 溝跡（第3表，第6・15図，第5図版）

位置 北区中央 重複関係 RG06 溝跡と重複し，新しい。

規模等 幅 0.5m ~ 0.6m，延長 21.5m。検出面からの深さ 0.11m，断面は皿状。

走向 西~東 埋土 A 層 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG06 溝跡（第3表，第6・15図，第5図版）

位置 北区東 重複関係 RG05 溝跡と重複し，古い。

規模等 幅 0.54m ~ 1.1m，延長 25.8m 以上（調査区外），検出面からの深さ 0.19m。

断面は逆台形~皿状。 走向 北東~南 埋土 A, B 層 出土遺物 なし

時期 古代以降（走向から，RG10 溝跡と連続する可能性があり，古代平安時代の可能性がある。）

RG07 溝跡 (第3表, 第7・15図, 第5図版)

位置 中区北西 重複関係 RG01 溝跡と重複し, 古い。  
規模等 幅 0.52m ~ 0.85m, 延長 51.3m (調査区外), 検出面からの深さ 0.18m。断面は逆台形状。  
走向 北~南。攪乱により途切れながら延びる。 埋土 A層 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG08 溝跡 (第3表, 第8・9・15図, 第5図版)

位置 中区中央 重複関係 RG09 溝跡と重複し, 古い。  
規模等 幅 0.4m ~ 0.75m, 延長 41.1m (調査区外), 検出面からの深さ 0.46m。断面は逆台形状。  
走向 北東~南西 埋土 A1, A2, A3, A4層 出土遺物 なし  
時期 古代以降 (走向から, RG02・21 溝跡と連続する可能性があり, 古代平安時代の可能性がある。)

RG09 溝跡 (第3表, 第8・9・15図, 第5図版)

位置 中区中央 重複関係 RG08 溝跡と重複し, 新しい。  
規模等 幅 0.9m ~ 1.35m, 延長 32.8m 以上 (調査区外), 検出面からの深さ 0.46m。断面は逆台形。  
走向 北東~南西 埋土 A1 ~ A3層 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG10 溝跡 (第3表, 第8・10・11・15図, 第6図版)

位置 中区中央~南区中央 (走向から, RG06 溝跡と連続する可能性がある。)  
重複関係 RG14 溝跡と重複し, 古い。  
規模等 幅 0.5m ~ 1.1m, 延長 129.7m (調査区外), 検出面からの深さ 0.37m。断面は逆台形~皿状。  
走向 北東~南西 埋土 A1, A2, B1, B2層。A層に灰白色粉状パミスが混じる。  
出土遺物 なし 時期 古代 (平安時代)

RG11 溝跡 (第3表, 第10・12・13・16図, 第6図版)

位置 中区東~南区北東 重複関係 RG12・13・20 溝跡と重複し, 新しい。  
規模等 幅 0.35m ~ 1.15m, 延長 73.4m (北東調査区外), 検出面からの深さ 0.28m。  
断面は逆台形状~皿状。 走向 北東~南西へ途切れながら延びる。 埋土 A1, A2層  
出土遺物 なし 時期 古代以降

RG12 溝跡 (第10図)

位置 中区北東 重複関係 RG11 溝跡と重複し, 古い。 規模等 幅 0.5m ~ 0.9m, 延長 12.7m。  
走向 北東~南西 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG13 溝跡 (第3表, 第10・11・12・13・15・16図, 第6図版)

位置 中区南東部 重複関係 RG11・14 溝跡と重複し, 古い。  
規模等 幅 0.44m ~ 1.1m, 延長 50.5m, 検出面からの深さ 0.16m。断面は皿状。  
走向 北東~南西 埋土 A1層 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG14 溝跡 (第3表, 第11・15図)

位置 南区中央 重複関係 RG10・13 溝跡と重複し, 新しい。  
規模等 幅 0.25m～1.4m, 延長 55.1m (調査区外), 検出面からの深さ 0.1m。断面は皿状。  
走向 北東～南西へ延びる。 埋土 A1 層。ややグライ化し, 粉状の酸化鉄を含む。  
出土遺物 なし 時期 古代以降

RG15 溝跡 (第3表, 第13・14・16図, 第6図版)

位置 南区北東 重複関係 RG16 溝跡と重複し, 新しい。  
規模等 幅 0.4m～1.3m, 延長 41.1m, 検出面からの深さ 0.9m。断面は皿状。  
走向 西～東 埋土 A1～A3 層 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG16 溝跡 (第3表, 第13・14・16図, 第6図版)

位置 南区東 重複関係 RG15 溝跡と重複し古い。RG17 溝跡と重複し新しい。  
規模等 幅 0.4m～0.9m, 延長 49.3m (調査区外), 検出面からの深さ 0.13m。断面は皿状。  
走向 北～南～南東 埋土 A1, A2 層 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG17 溝跡 (第3表, 第14・16図, 第6図版)

位置 南区南東 重複関係 RG16 溝跡と重複し, 古い。  
規模等 幅 1.0m～1.8m, 延長 20.5m (調査区外), 検出面からの深さ 0.15m。断面は皿状。  
走向 南～東 埋土 A1, A2 層 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG18 溝跡 (第3表, 第13・16図, 第6図版)

位置 南区東 重複関係 なし  
規模等 幅 0.9m～1.45m, 延長 16.5m, 検出面からの深さ 0.5m。断面は皿状。  
走向 北～南 埋土 A 層 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG19 溝跡 (第3表, 第13・16図, 第7図版)

位置 南区東 重複関係 なし  
規模等 幅 0.35m～1.1m, 延長 27.4m, 検出面からの深さ 0.4m。  
走向 北～南 埋土 A1, A2 層 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG20 溝跡 (第3表, 第12・13・16図, 第7図版)

位置 南区中央 重複関係 RG11 溝跡と重複, 古い。 規模等 幅 0.4m～0.8m, 延長 46.2m。  
走向 北西～南東 埋土 A1 層 出土遺物 なし 時期 古代以降

RG21 溝跡 (第3表, 第11・16図, 第7図版)

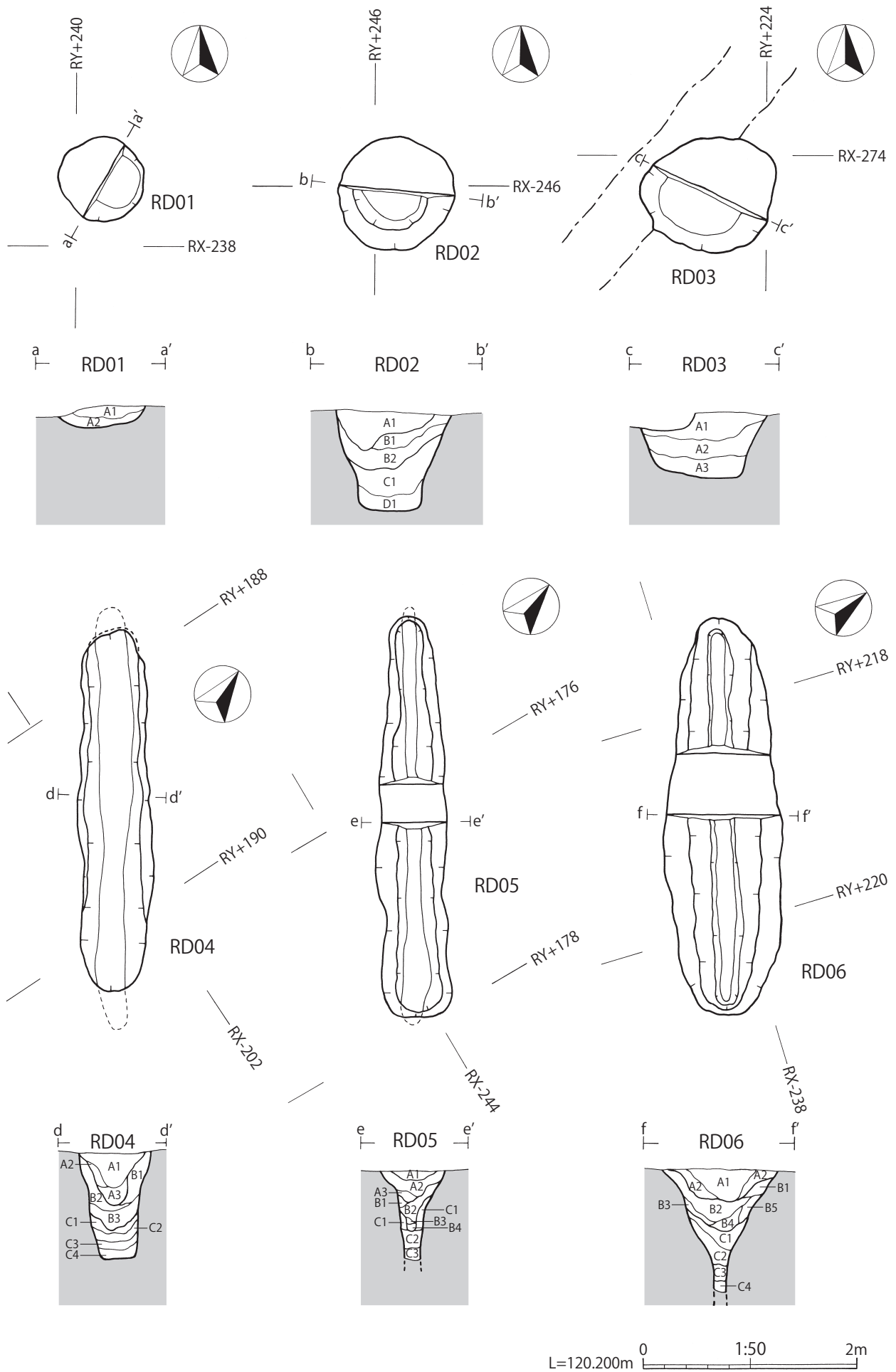
位置 南区北西 重複関係 なし  
規模等 幅 0.45m～0.9m, 延長 32.8m 以上 (調査区外), 検出面からの深さ 0.16m。断面は皿状。  
走向 北～南西 埋土 A1, A2 層。粒状酸化鉄僅かに含む。 出土遺物 なし  
時期 古代以降 (走向から RG03・19・21 溝跡と連続する可能性があり, 平安時代の可能性がある。)

第2表 土坑 土層観察表

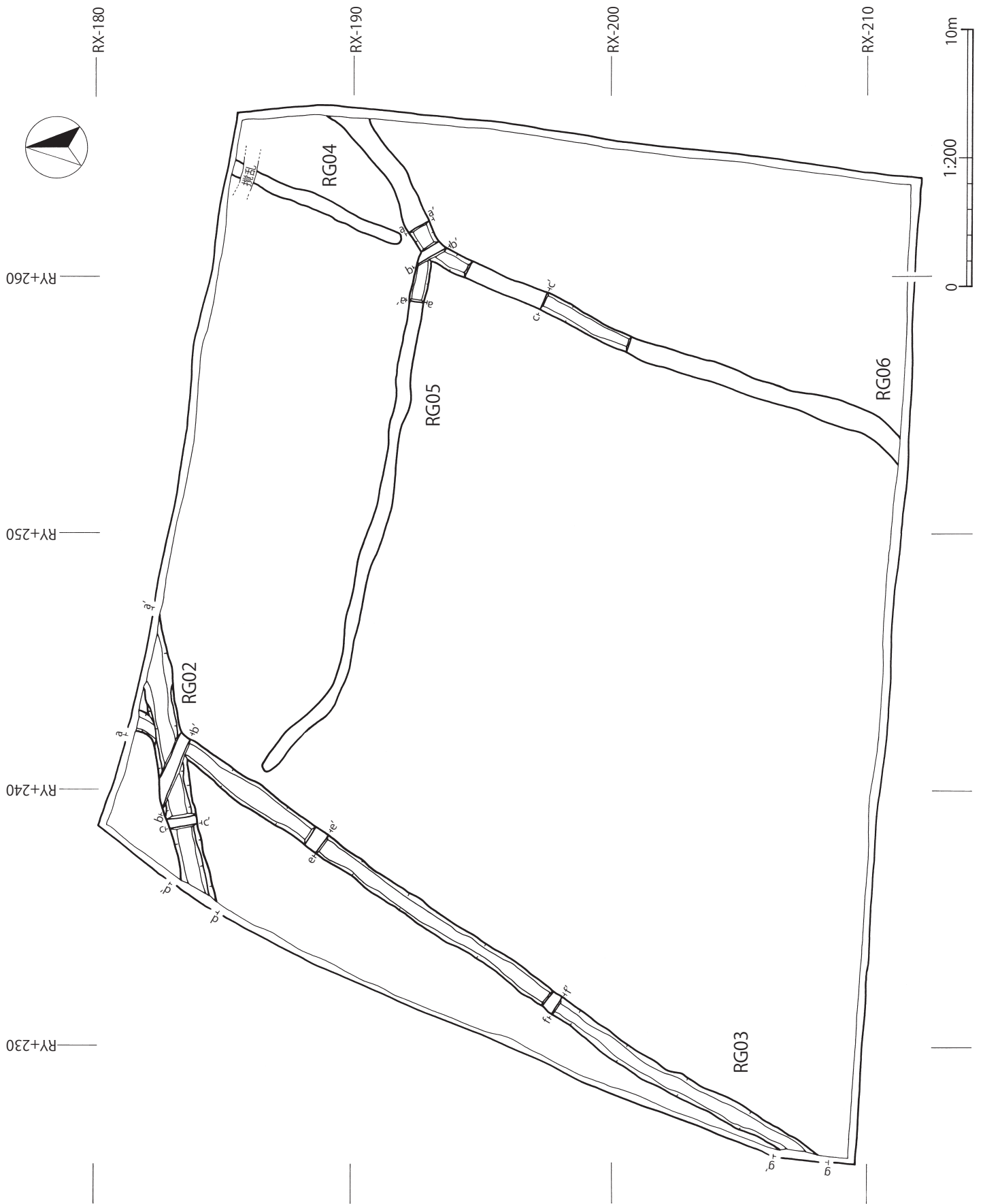
位置 調査区	遺構名	層名	主要土		含有土				密度	軟硬	その他
			土性	土色 (JIS)	土性	土色 (JIS)	状態	%			
中区	RD01	A1	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒～塊状	20	中	中	
		A2	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～塊状・層状	40	中	中	
中区	RD02	A1	SiCl	10YR2/1-2/2	SiCl	10YR4/4-4/6	粉状	5	中	中	
		A2	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒状	15	中	中	
		A3	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粒～塊状	30	中	中	湧水あり
南区	RD03	A1	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒状	3	中	中	自然堆積
		B1	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粒～塊状	40	中	中～硬	人為堆積
					SiCl	10YR3/3-3/4	粒～塊状	20			
		B2	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR2/2-2/3	粉～塊状	30	中	中	人為堆積
					SiCl	10YR3/3-3/4	粉～塊状	20			
		C1	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR3/3-3/4	粒～塊状・層状	20	中	中	人為堆積
					SiCl	10YR4/4-4/6	粒～塊状・層状	20			
D1	SiCl	10YR3/3-3/4	SiCl	10YR2/1-2/2	粉状・層状	20	中	中	自然堆積		
中区	RD04	A1	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR2/1	粉状	5	中	中	
					SiCl	10YR4/4	粉～粒状	15			
		A2	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒状	30	中	中	
					SiCl	10YR4/4-4/6	粉～塊状	10			
		A3	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR3/4	粉状	10	中	中	
					SiCl	10YR4/6	塊状	5			
		B1	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3-2/2	粉～粒状	30	中～密	中～硬	
		B2	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR3/4	粉	10	中～密	中～硬	
					SiCl	10YR2/3	粉	10			
		C1	SiCl	10YR3/4-4/4	SiCl	10YR4/6	粉～塊状	5	中～密	中～硬	
					SiCl	10YR2/2	粉状	3			
		C2	SiCl	10YR2/3-2/2	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～塊状	15	中～密	中～硬	
		C3	SiCl	10YR3/4-4/4	SiCl	10YR2/3	粉状	20	中～密	中～硬	
C4	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR2/3-2/2	粉状	20	中～密	中～硬			
中区	RD05	A1	SiCl	10YR2/2-2/1	SiCl	10YR4/4	粉～塊状	20	中	中	
		A2	SiCl	10YR2/3-2/2	SiCl	10YR4/4	粉～塊状	10	中	中	
		A3	SiCl	10YR2/3-2/2	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～塊状	20	中	中	
					SiCl	10YR3/4	粉状	5			
		B1	SiCl	10YR3/3-3/4	SiCl	10YR2/2-2/3	粉～粒状	20	中	中	
		B2	SiCl	10YR3/3-3/4	SiCl	10YR2/2-2/1	粉～粒状	5	中	中	
					SiCl	10YR4/4-4/6	粉状	5			
		B3	SiCl	10YR3/3-3/4	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒状	5	中	中	
		B4	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR3/3-2/3	粉状	10	中～密	中	
		C1	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR2/1-2/2	粒状	5	中～密	中～硬	
		C2	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR3/3-3/4	粉～塊状	20	中～密	中～硬	
SiCl	10YR2/1-2/2				粉状	10					
C3	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR3/3-4/3	粉状	10	中～密	中～硬	湧水あり		
			SiCl	10YR2/1-2/2	粉状	5					
中区	RD06	A1	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉状	10	中	中	
		A2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉状	20	中	中	
		B1	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉状	10	中	中	
		B2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～塊状	20	中	中	
		B3	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR2/3	粉～粒状	10	中	中	
		B4	SiCl	10YR3/4-3/3	SiCl	10YR2/3	粉～粒状	20	中	中	
		B5	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～塊状	20	中	中	
		C1	SiCl	10YR3/3-3/4	SiCl	10YR2/2-2/3	粉～粒状	5	中	中	
					SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒状	20			
		C2	SiCl	10YR3/3-3/4	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒状	20	中	中	
					SiCl	10YR2/2-2/3	粉状	5			
		C3	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR3/4-3/3	粉～粒状	10	中～密	中～硬	
					SiCl	10YR2/1-2/2	粉～粒状	10			
		C4	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR3/4-3/3	粉～粒状	20	中～密	中～硬	湧水あり
SiCl	10YR2/3				粉～粒状	5					

第3表 溝跡 土層観察表

位置 調査区	遺構名	層名	主要土		含有土				密度	軟硬	その他		
			土性	土色 (JIS)	土性	土色 (JIS)	状態	%					
中区	RG01	A1	SiCl	10YR2/1-1.7/1	SiCl	10YR3/3-3/4	粉状	3	中	中			
		A2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR3/3-3/4	粉状	10	中	中			
		A3	SiCl	10YR3/3-3/4	SiCl	10YR2/2-2/1	粉~粒状	10	中	中			
					SiCl	10YR4/4-4/6	粉~粒状	10					
A4	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~粒状	15	中~密	中~硬	酸化鉄を僅かに含む				
			SiCl	10YR2/1	粒状	5							
北区	RG02	A	SiCl	10YR2/3-2/2	SiCl	10YR3/3-3/4	粉状	20	中	中			
					SiCl	10YR4/4-4/6	粉状	5					
		B1	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4	粉状	20	中~密	中~硬	土器片出土 粉状灰白色火山灰含		
					Cl	10YR8/2	粉~塊状	10					
		B2	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	10YR4/4	粉状	10	中~密	中~硬	土器片出土 粉状灰白色火山灰含		
					SiCl	10YR2/1	粉状	5					
		B3	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4	粉状	20	中~密	中~硬	土器片出土 粉状灰白色火山灰含		
					SiCl	10YR2/2	粉~粒状	5					
		C1	SiCl	10YR2/3-3/3	Cl	10YR8/2	粉~粒状	5	中~密	中~硬	土器片出土		
					SiCl	10YR2/1	粉状	5					
北区	RG03	A1	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4	粉~粒状	20	中	中			
					SiCl	10YR2/1	粉状	5					
北区	RG05	A	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~粒状	30	中	中			
北区	RG06	A	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~塊状	30	中	中			
		B	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~塊状	20	中~密	中~硬			
中区	RG07	A	SiCl	10YR2/2-2/1	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~粒状	10	中~密	中~硬			
		A	SiCl	10YR2/2-2/1	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~粒状	10	中~密	中~硬			
中区	RG08	A1	SiCl	10YR3/3-3/4	SiCl	10YR2/3-2/2	粉状	20	中~密	中~硬			
					SiCl	10YR4/4-4/6	粉~塊状	20					
		A2	SiCl	10YR2/3-2/2	SiCl	10YR3/3-3/4	粉状	10	中~密	中~硬			
					SiCl	10YR4/4-4/6	粉状	3					
		A3	SiI	10YR4/4-4/6	SiI	10YR2/3-2/2	粉状	30	中~密	中~硬	水成堆積		
		A4	SiCl	10YR2/2~2/3	SiI	10YR2/3-2/2	粉・層状	40	中	中	水成堆積		
		中区	RG09	A1	SiCl	10YR2/2-2/1	SiCl	10YR3/3	粉状	10	中~密	中~硬	
							SiCl	10YR4/4-4/6	粉状	30			
A2	SiCl			10YR2/3-2/2	SiCl	10YR3/3	粉状	10	中~密	中~硬			
A3	SiCl	10YR2/3-2/2	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~塊状	30	中~密	中~硬					
中~南	RG10	A1	SiCl	10YR2/1-2/2	SiCl	10YR2/3	粉状	10	中	中	粉状灰白色火山灰含		
					SiI	10YR8/2	ブロック状	3					
		A2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR2/1-2/2	粉状	30	中	中	粉状灰白色火山灰 僅かに含む		
					Cl	10YR8/2	粉状	1					
		A3	SiCl	10YR2/3-2/2	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~粒状	10	中	中			
					SiCl	10YR3/3	粉~粒状	10					
		A4	SiCl	10YR3/3-2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~塊状	30	中	中			
		B1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/3-2/2	粉~ブロック状	40	中	中			
SiCl	10YR4/4-4/6				粉~ブロック状	20							
B2	SiCl	10YR3/3-2/3	SiCl	10YR2/1	粉状	5	中	中					
中~南	RG11	A1	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉~粒状	5	中	中			
					SiCl	10YR2/1	粉~粒状	5					
A2	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4	粉~塊状	5	中	中					
			SiCl	10YR4/4	粉~塊状	5							
中~南	RG13	A1	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4	粉~粒状	10	中	中			
南区	RG14	A1	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~粒状	10	中	中	ややグライ化 粉状に酸化鉄を含む		
南区	RG15	A1	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粒~塊~粉状	5	中	中~硬			
		A2	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~塊状	20	中~密	中~硬			
		A3	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR2/2-2/3	粉状	10	中~密	中~硬			
南区	RG16	A1	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~粒状	10	中~密	中~硬			
		A2	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~粒状	20	中	中			
					SiCl	10YR4/4-4/6	粉~粒状	20					
A3	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/2	粉状	10	中	中					
南区	RG17	A1	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉状	10	中	中			
		A2	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~塊状	20	中	中			
南区	RG18	A	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	10YR4/6	粉~塊状	10	中	中			
南区	RG19	A1	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/6	粉状	3	中	中			
		A2	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/6	粉~塊状	20	中	中			
南区	RG20	A1	SiCl	10YR2/3-3/3	SiCl	10YR4/6	粉~塊状	20	中	中			
					SiCl	10YR2/1	粉状	5					
南区	RG21	A1	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR3/3-3/4	粉状	10	中~密	中~硬			
		A2	SiCl	10YR3/3-4/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉~塊状	20	中~密	中~硬	酸化鉄を僅かに含む		

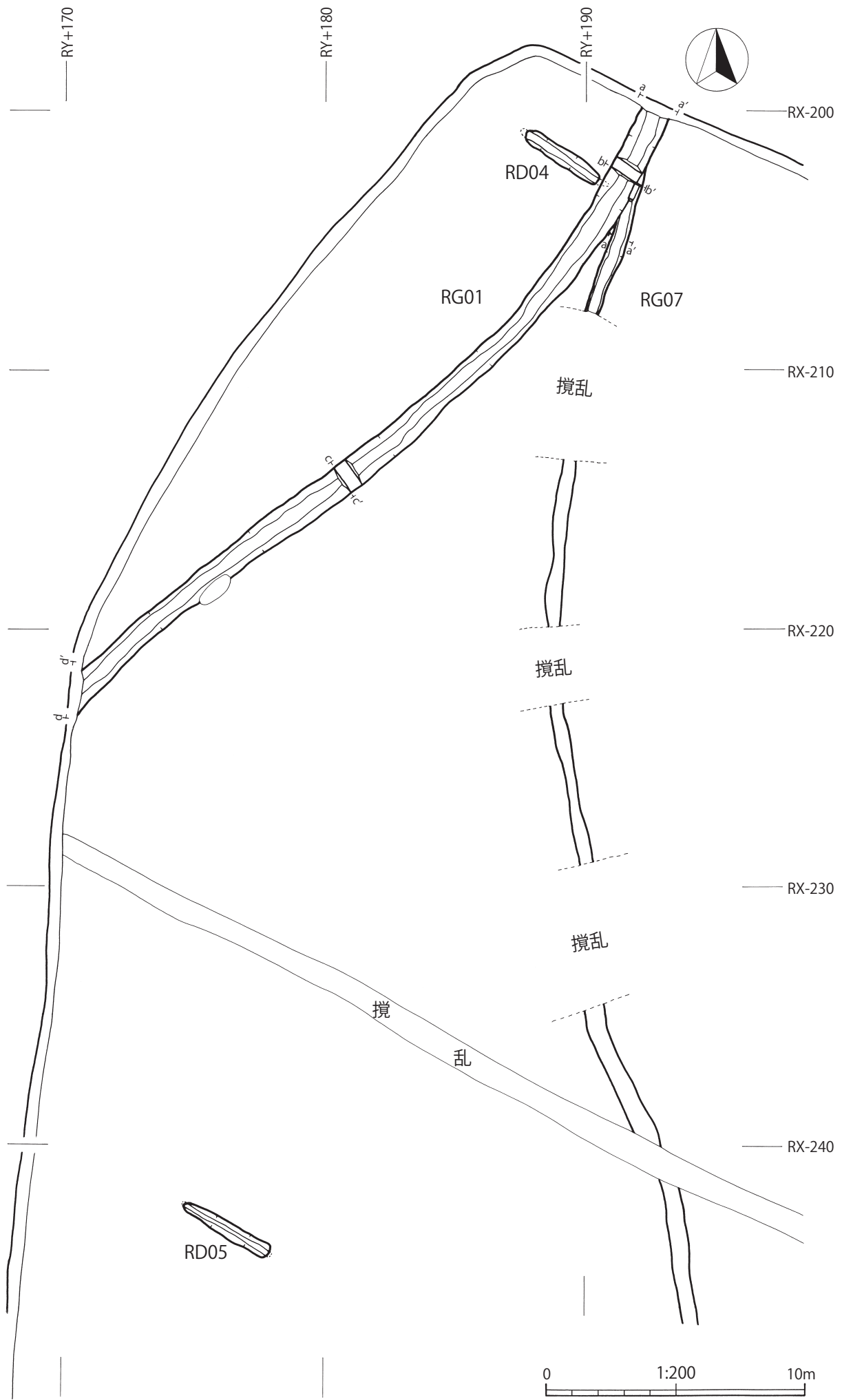


第5图 RD 01~06土坑

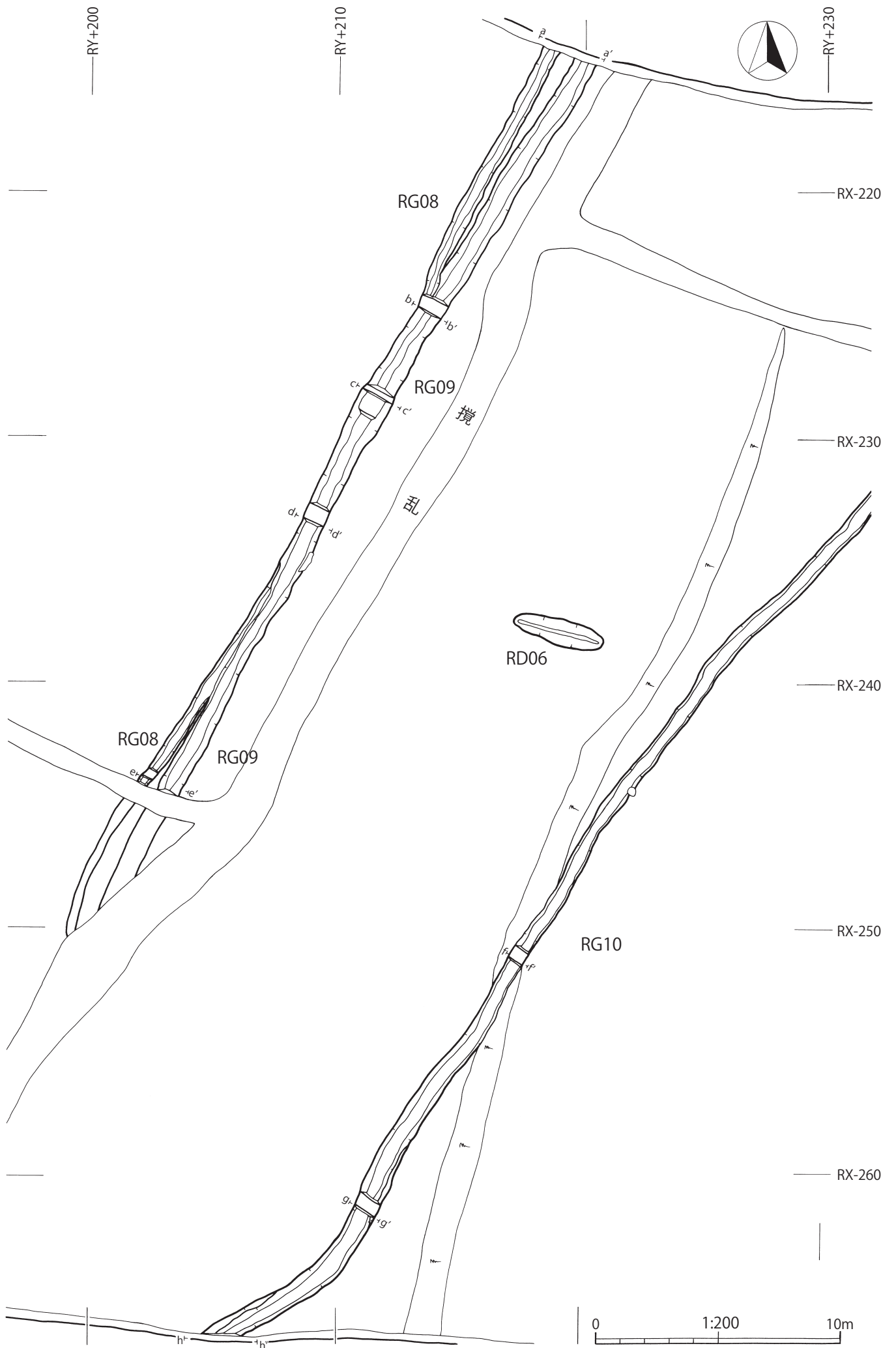


第6図 北区 RG 02 ~ 06 溝跡

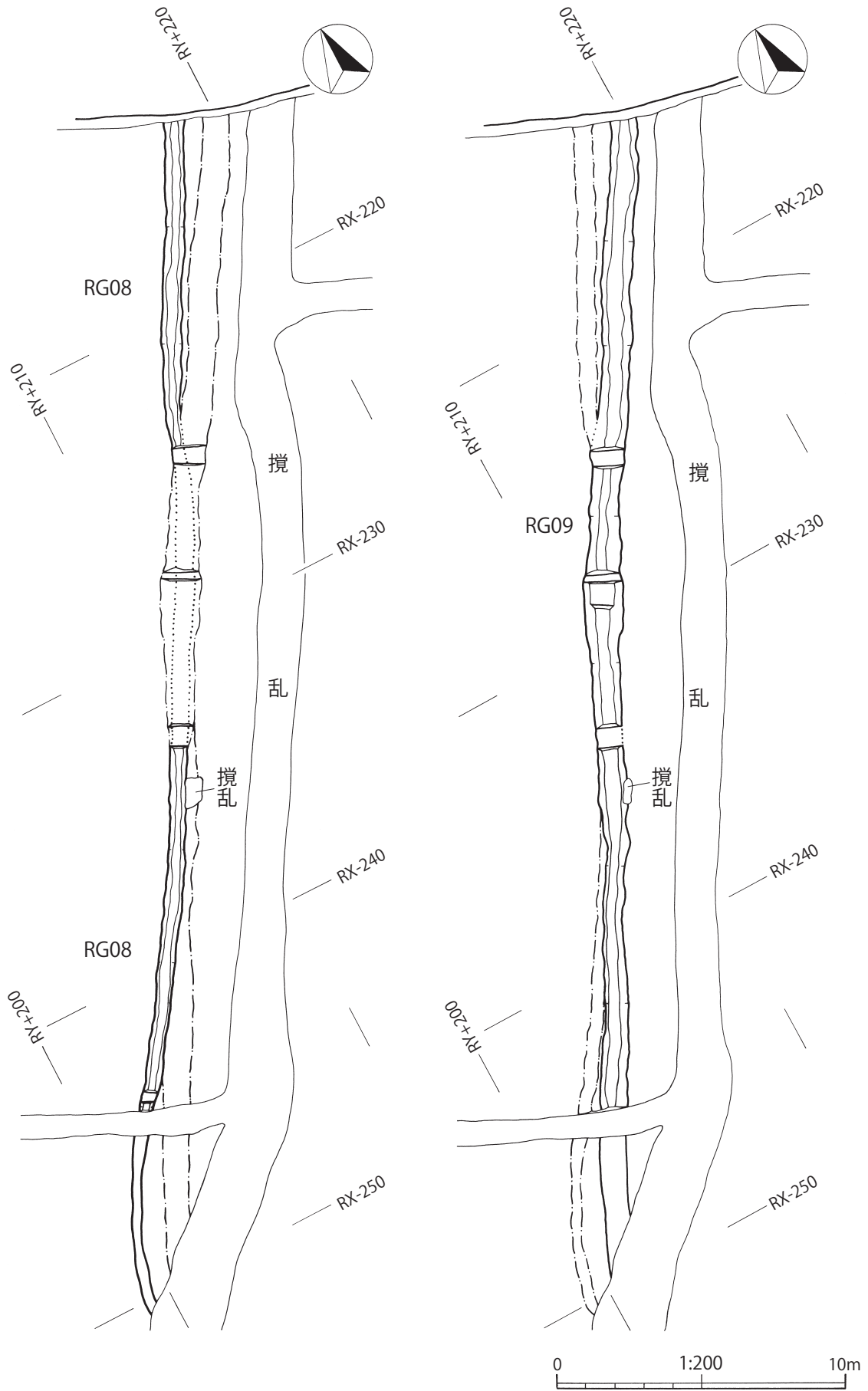




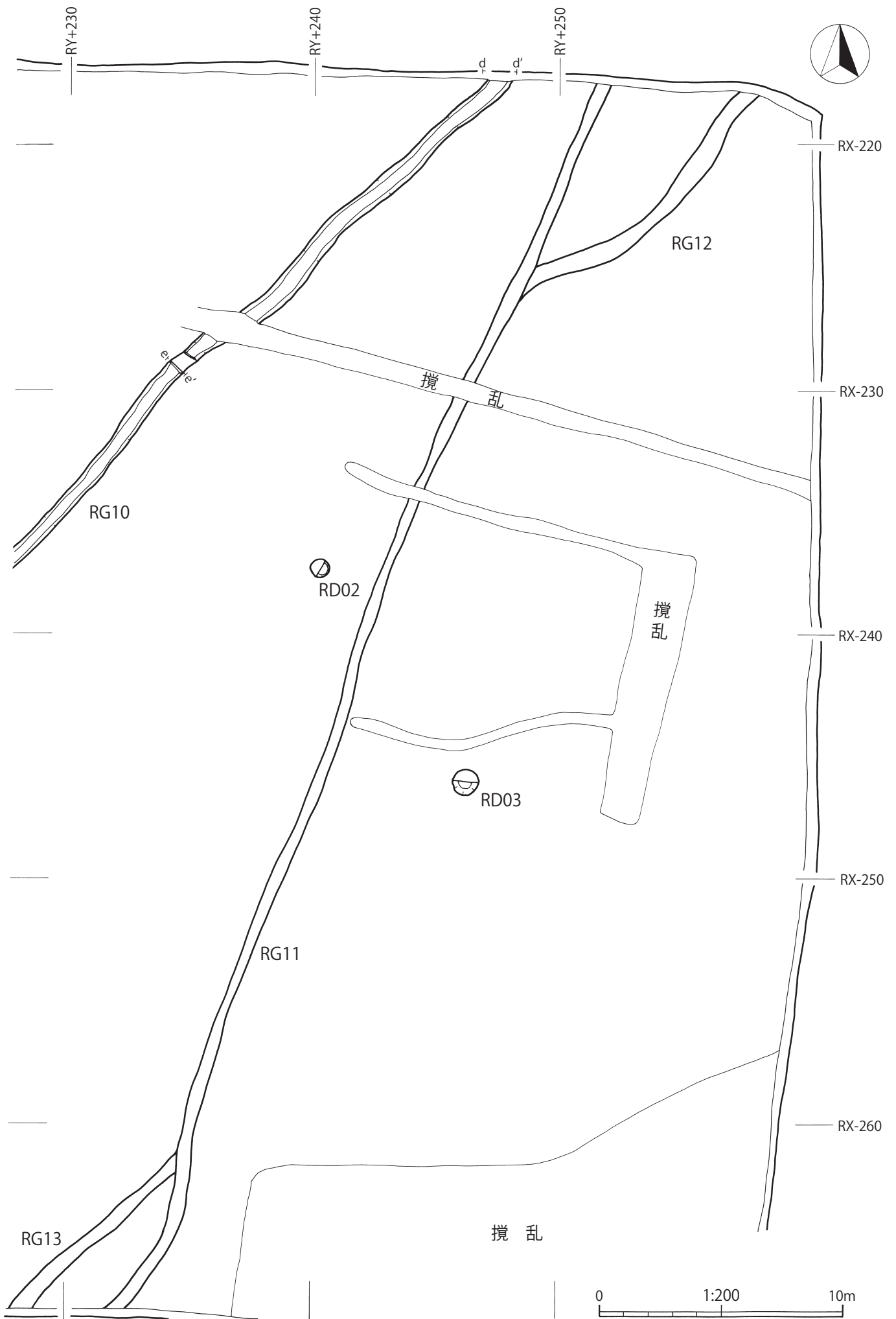




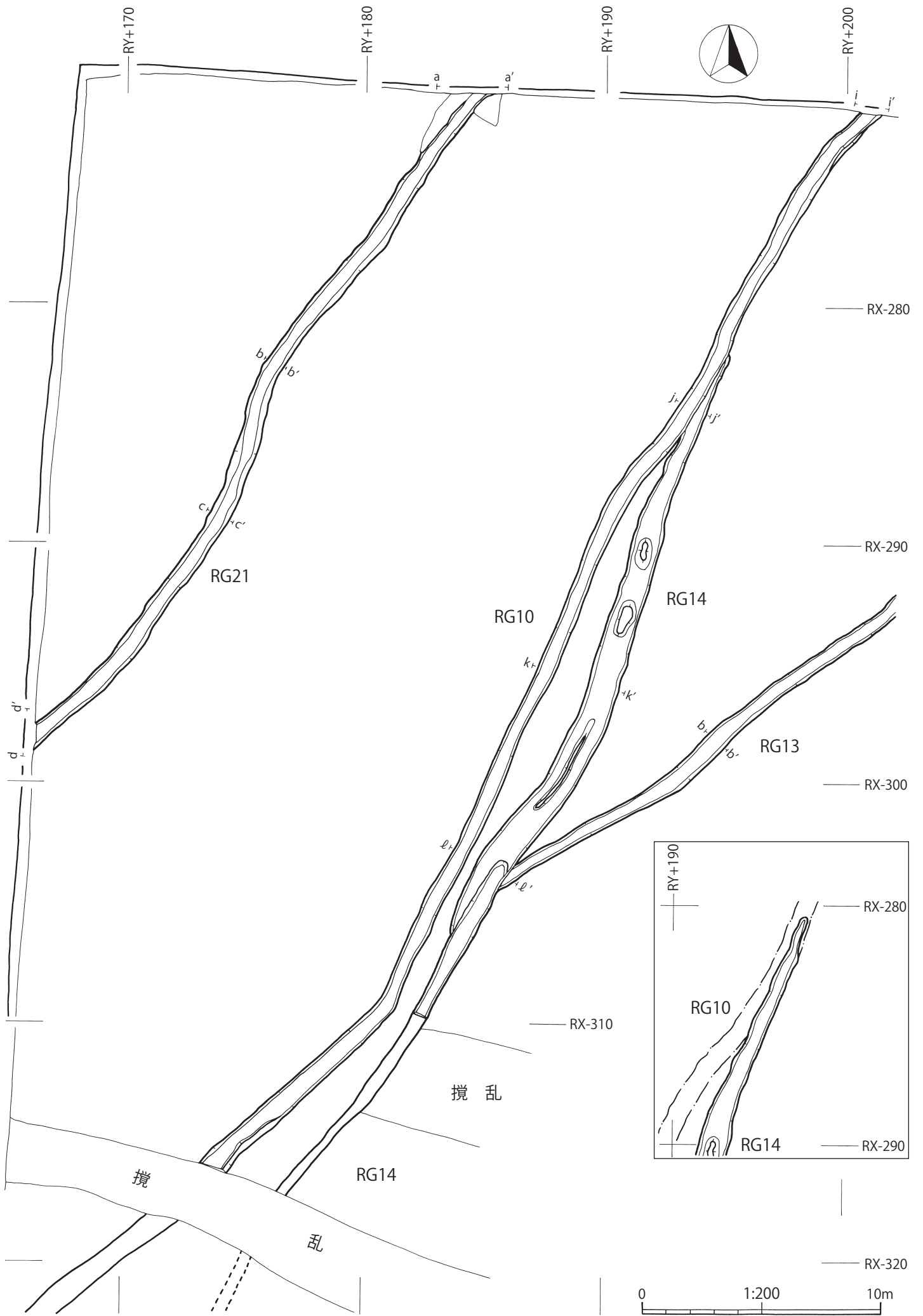
第8図 中区(2) RG 08~10 溝跡



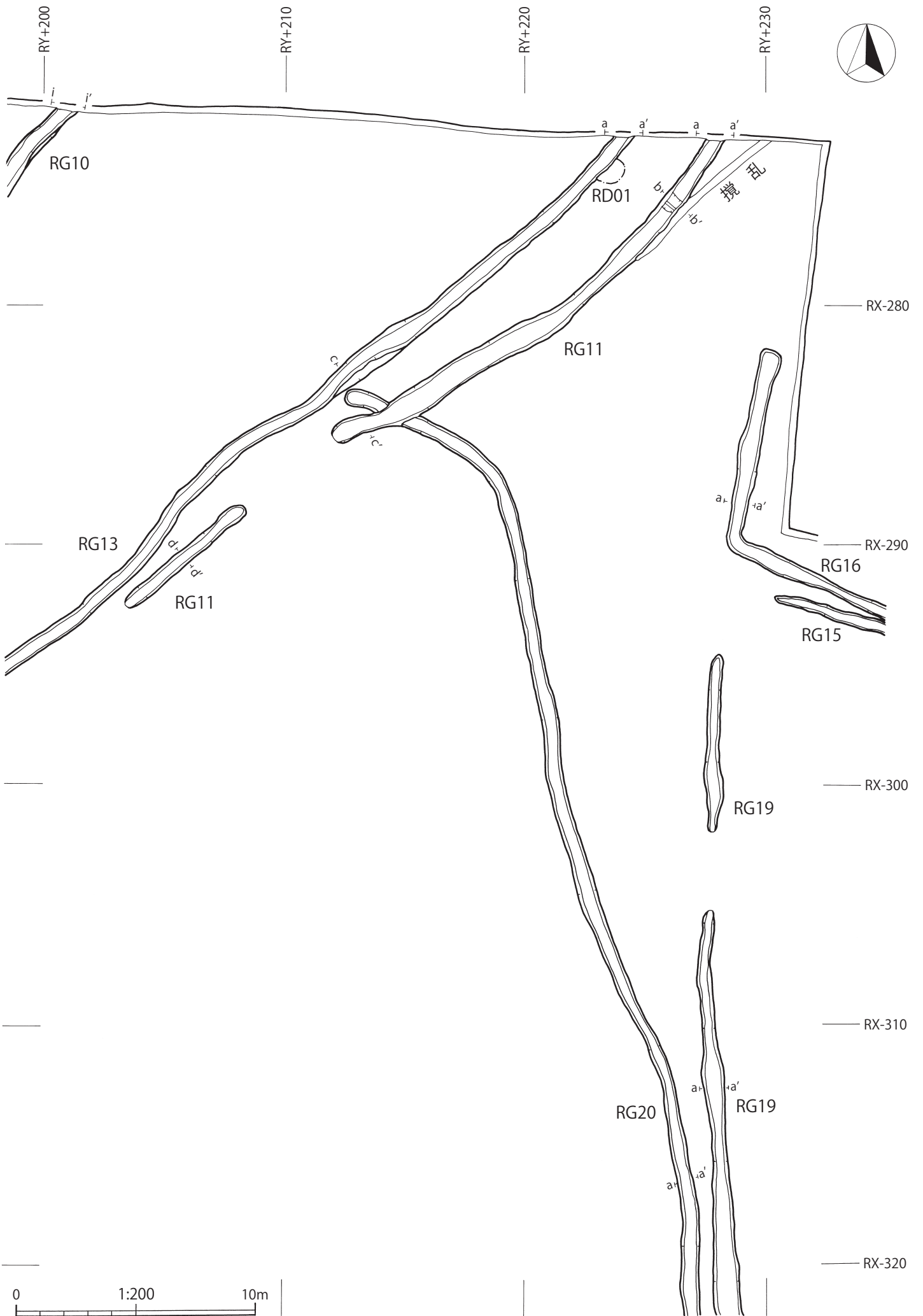
第9图 中区(3) RG 08·09 沟迹



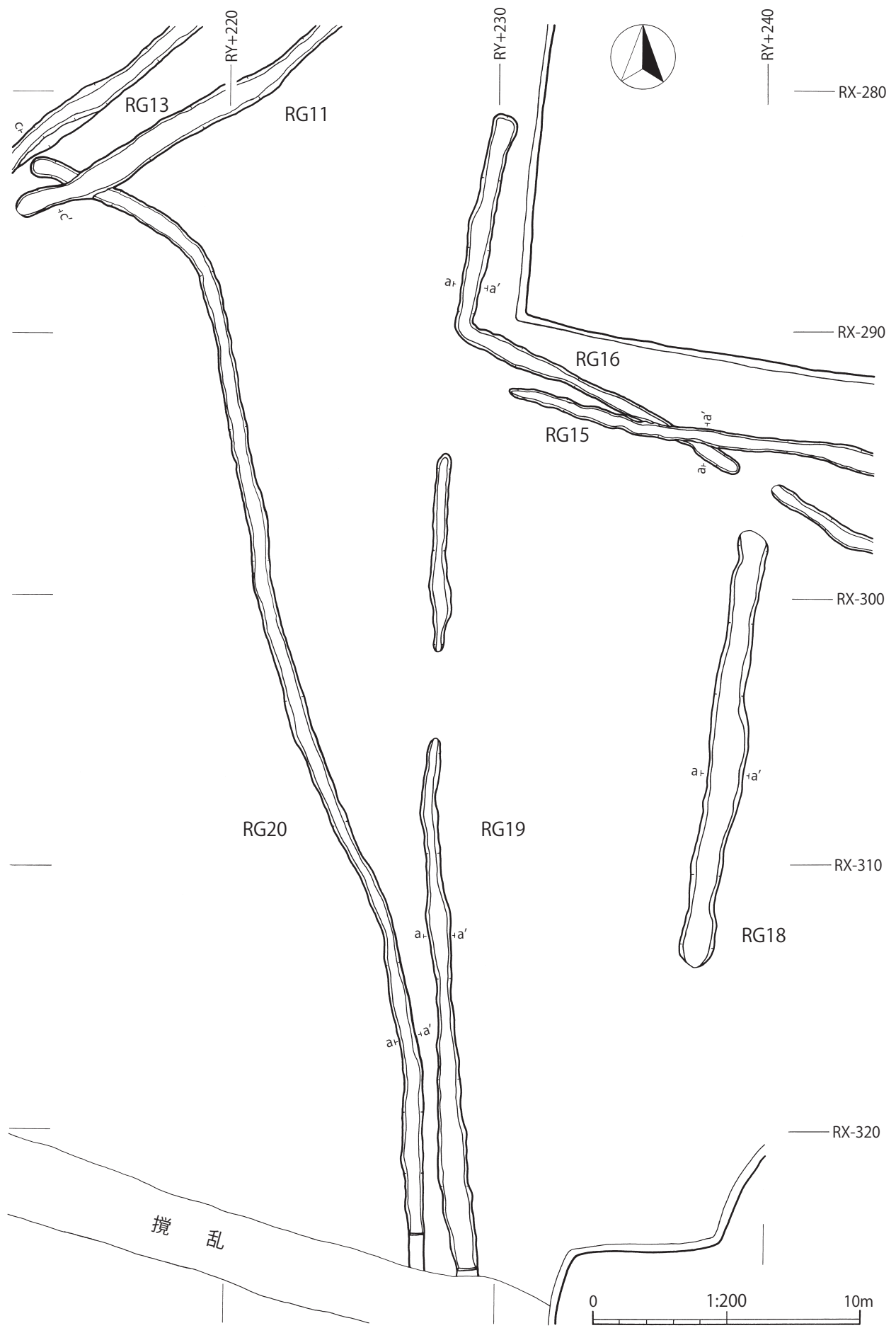
第10図 中区(4) RG 10~13 溝跡



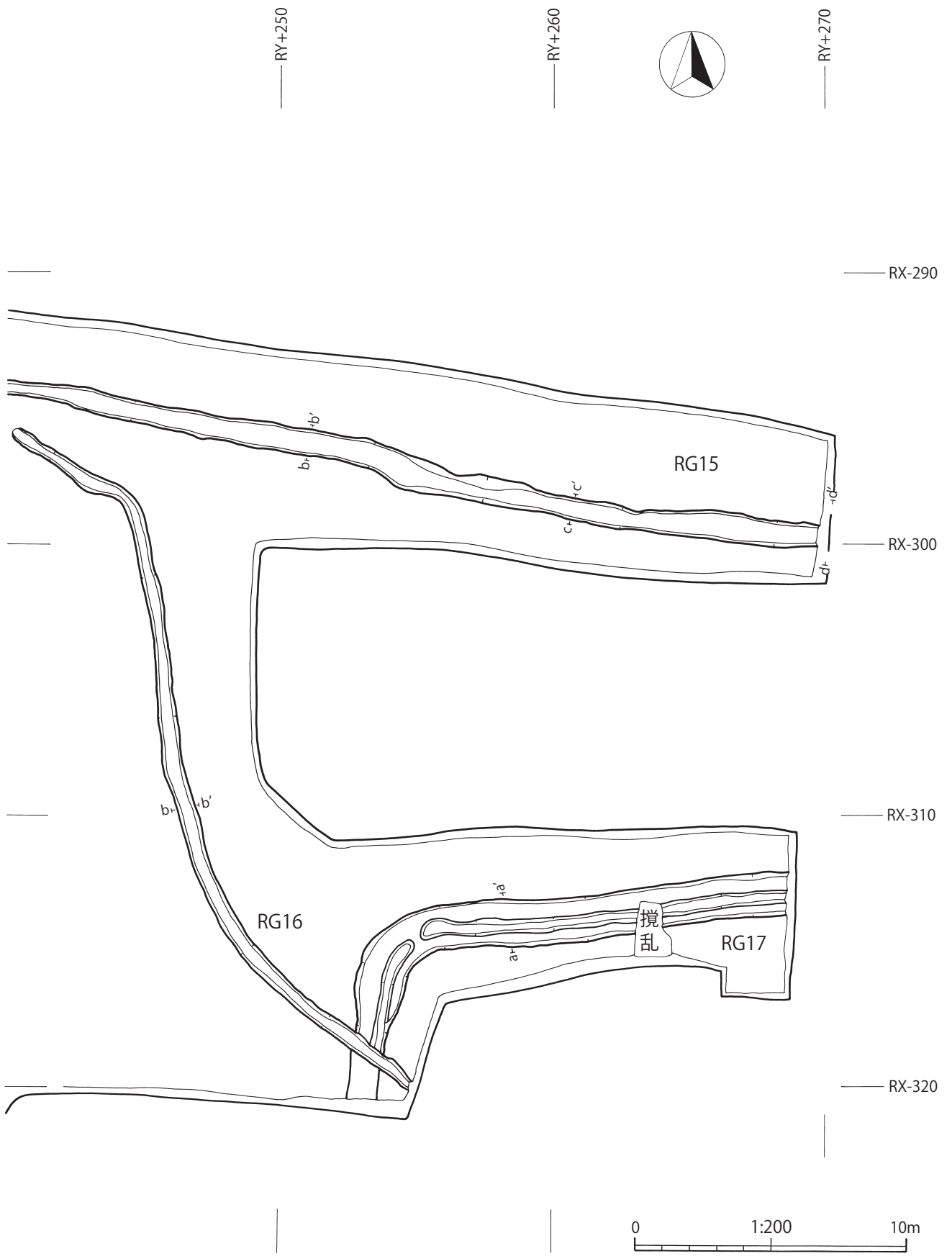
第11图 南区(1) RG 10·13·14·21 沟迹



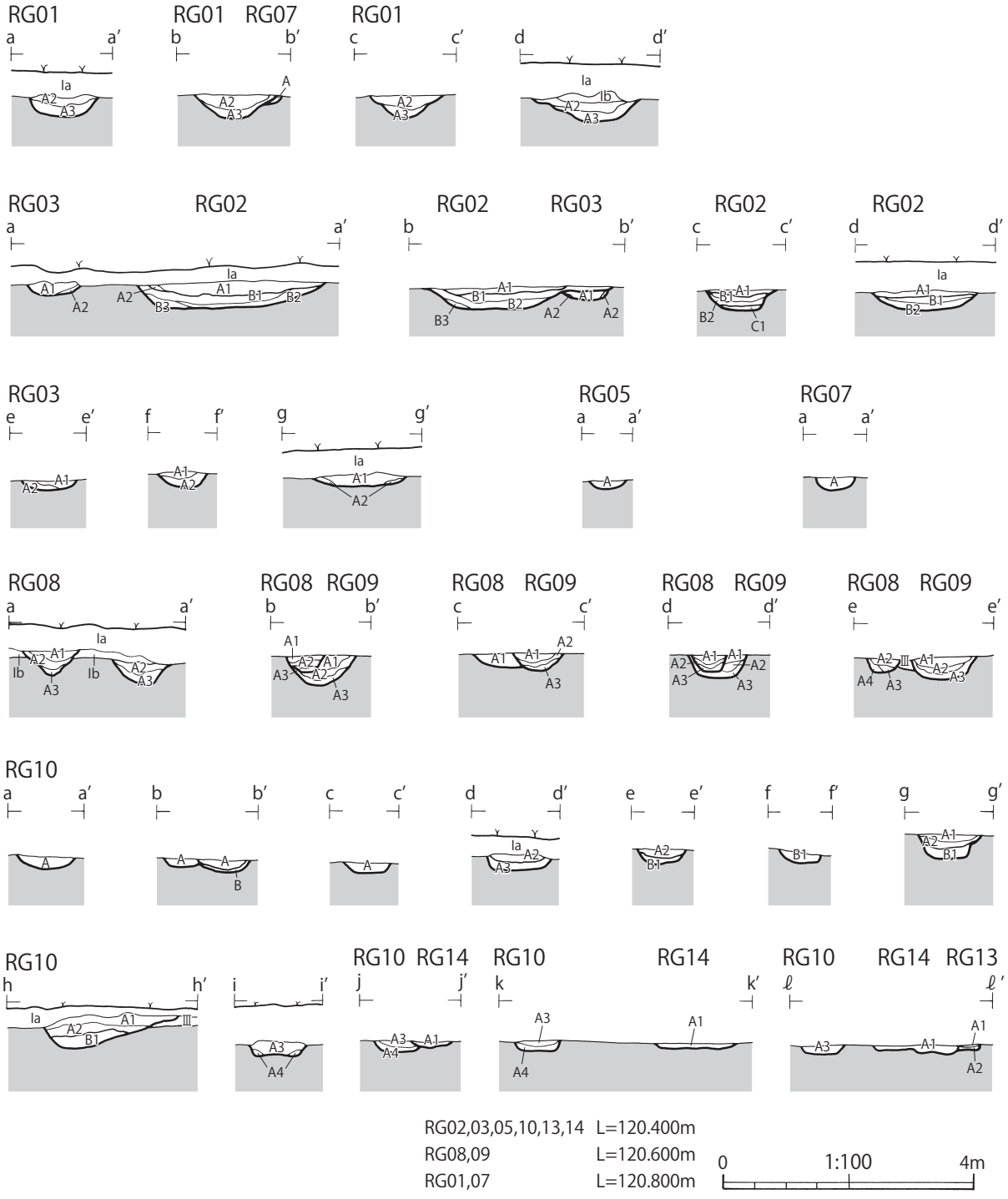
第12图 南区(2) RG 10·11·13·15·16·19·20 沟迹



第13図 南区(3) RG 11・13・15・16・18～20 溝跡

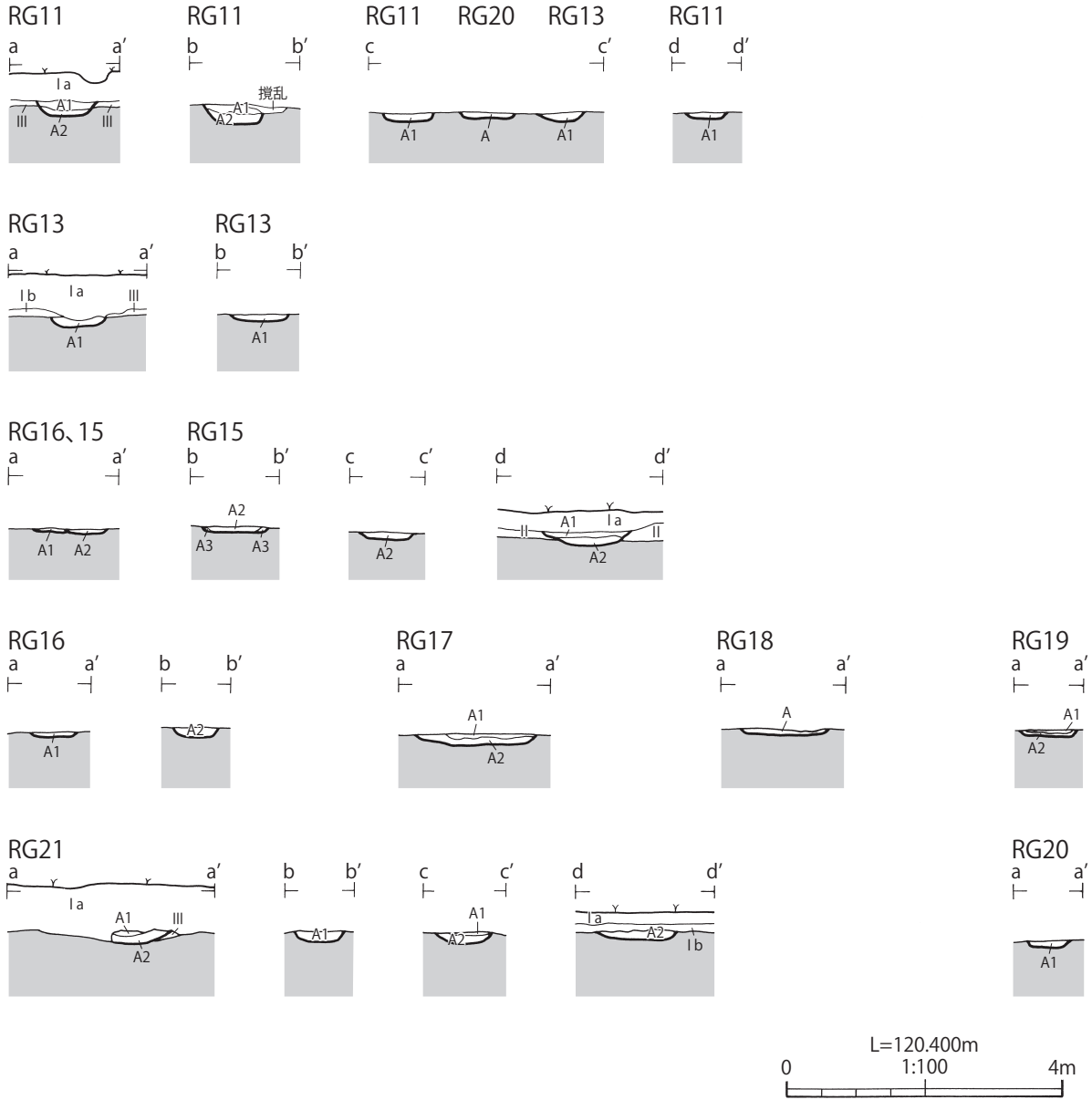


第 14 图 南区(4) RG 15 ~ 17 溝跡



第 15 图 RG 01 ~ 10 · 13 · 14 溝跡 断面





第16图 RG 11·13·15~21 沟迹 断面

#### 4 遺物 (第4表, 第17図, 第8図版)

各遺構検出面や埋土などから、古代の土器や、近世～現代にかけての陶磁器、ガラス製品、木製品等が出土した。

第17図1～3は、RG02溝跡から出土した古代の土器である。1はあかやき土器の坏である。9世紀半ば以降のものと考えられる。2は、土師器の坏である。ロクロ成形の後、底面及び外面をヘラナデ再調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。胎土に海綿骨針が混入する。9世紀代のものと考えられる。3は須恵器の甕の体部である。外面ヘラケズリ、内面はナデ調整が施されている。

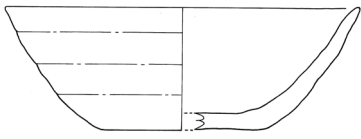
第17図4は、南区の検出面から出土した弥生時代後期の土器である。黒色を呈し、縦方向の沈線と、刺突文が施されている。続縄文土器の後北式の模倣か。

第17図5は、南区南部の攪乱（近代以降の水路跡）検出面から出土した、木製品の下駄である。縦方向に半分に割れている。台と歯を一木から作る連歯下駄である。台には、不整円形に鼻緒の穴が穿孔されており、周囲に使用によって擦れたと考えられる跡が確認できる。前壺は台の中央、後壺は歯の内側にあげられ、平面形は隅丸長方形を呈する。長さ21.6cm、残存する幅は4.5cm、台の厚さは1.2cm、歯の幅は2.6～2.8cm、歯の高さは1.2cm、前壺後壺とも直径1.0cm前後を計る。台の前後や歯は、擦痕があり摩滅し、使い込まれ破損したため廃棄された物と考えられる。科学分析の結果、材質はマキ属（イヌマキ）であり、AMS年代測定の結果、古くても17世紀以降のものと考えられる（第4章参照）。

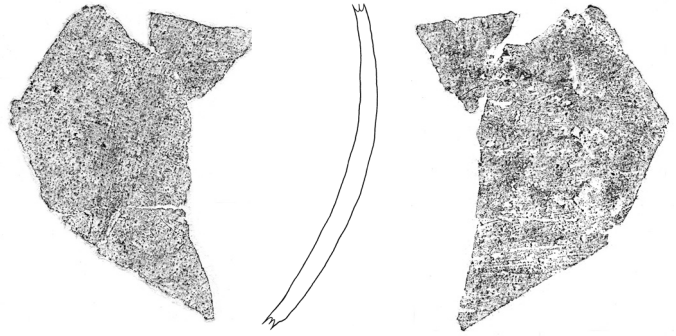
写真図版6は、中区検出面から出土したガラス瓶である。昭和前期の「蜜柑水」（清涼飲料水）のガラス瓶と考えられる。

第4表 出土遺物

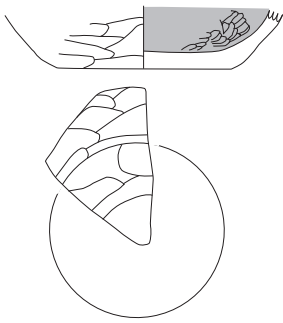
図 図	番号	写真図版		台帳 番号	出土			形態		寸法(cm)			切り離し	器面調整		その他
		図版	番号		位置	遺構	層位	区分	器種	器高	口径	底径		外面	内面	
17	1	8	1	2-01	北区	RG02	C層	あかやき土器	坏	4.9	14.1	6.5	糸切り	摩滅	摩滅	9世紀半ば
	2		2	2-13	北区	RG02	B層	土師器	坏	-	-	7.0	回転糸切・ヘラナデ再調整	ヘラナデ	ヘラミガキ 黒色処理	9世紀 胎土に 海綿骨針
	3		3	2-05	北区	RG02	B層	須恵器	甕	-	-	-		ヘラケズリ	ナデ	9世紀
	4		4	1-03	南区	-	検出面	弥生土器	-	-	-	-		沈線文 刺突文		内外面黒色 弥生後期
	-		6	4-54	中区	-	検出面	ガラス製品	瓶	15.5		4.3				昭和前期 みかん水
図 図	番号	写真図版 図版	番号	台帳 番号	出土			形態		寸法(cm)					その他	
番号	図版	番号	台帳 番号	位置	遺構	層位	区分	器種	高	幅	厚	歯幅	歯高	壺径		
17	5	8	5	5-05	南区	攪乱	検出面	木製品	下駄	21.6	-	1.2	2.6～2.8	1.2	1.0	近世以降 材質イヌマキ



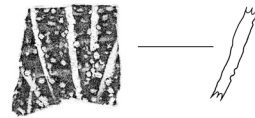
1 あかやき土器 坏  
RG02 C層



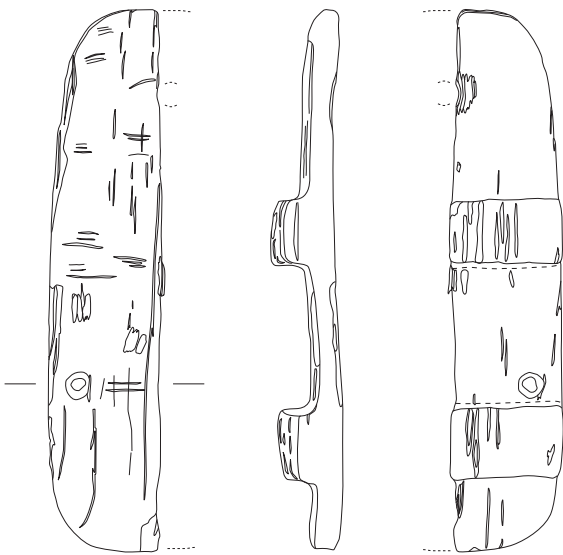
3 須恵器 甕  
RG02 B層



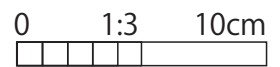
2 土師器 坏  
RG02 B層



4 弥生土器  
南区 検出面



5 木製品 下駄  
南区南部 攪乱検出面



第17図 出土遺物

# 第4章 科学分析結果

## 1 木製品科学分析結果

### 向中野幅遺跡第4次調査における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

向中野幅遺跡は、岩手県盛岡市向中野字畑返地内（北緯 39°40′14.4″，東経 141°08′48.3″）に所在し，現在は水田となっている。測定対象試料は，地表面から約 40～50cm の旧水路跡遺構検出面から出土した木製品（下駄）から採取した木片 1 点である（表 1）。旧水路跡は近世以降の遺構と考えられている。

なお，この同一試料を対象に樹種同定も実施されている（別稿樹種同定報告参照）。

#### 2 測定の意義

出土試料の年代測定，遺構の年代を明らかにする。

#### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い，付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常 1mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」，1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

#### 4 測定方法

加速器をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し，<sup>14</sup>C の計数，<sup>13</sup>C 濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C），<sup>14</sup>C 濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は，試料炭素の <sup>13</sup>C 濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C 年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中 <sup>14</sup>C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。<sup>14</sup>C 年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1

に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表1, 2に示す。

試料の $^{14}\text{C}$ 年代は $210 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代( $1\sigma$ )は1654 ~ 1799cal ADの間に2つの範囲と、1941cal AD以降の範囲で示される。試料となった木製品は、近世以降の水路跡から出土していることから、遺構の年代を含む結果となった。なお、この試料の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(表2下の警告参照)。

試料は木製品として加工されていたことから、以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。今回測定された試料には樹皮が確認されていないことから、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は54%の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。



AMS 測定試料採取位置

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表 1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
<b>IAAA-183070</b>	木製品(下駄)・No.5-005	南区近世以降水路跡検出面	木片	AAA	<b>-23.14 ± 0.36</b>	<b>210 ± 20</b>	<b>97.42 ± 0.28</b>

[IAA 登録番号：#9583]

表 2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值, 暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代, 較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
<b>IAAA-183070</b>	180 ± 20	97.80 ± 0.27	209 ± 23	1654calAD - 1675calAD (22.5%)* 1777calAD - 1799calAD (30.9%)* 1941calAD - ... (14.7%)*	1648calAD - 1683calAD (30.0%)* 1737calAD - 1804calAD (48.1%)* 1936calAD - ... (17.3%)*

[参考値]

\*Warning! Date may extend out of range

(この警告は較正プログラムOxCalが発するもので、試料の $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

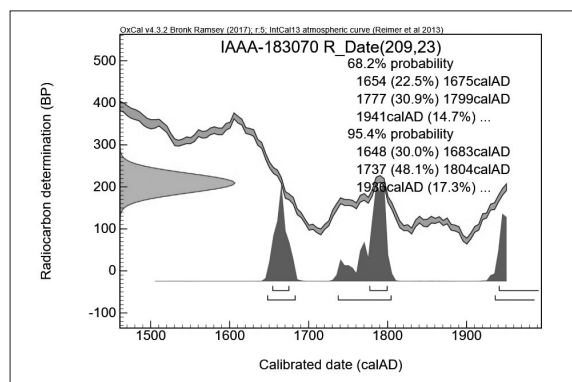


図 1 暦年較正年代グラフ (参考)



## 向中野幅遺跡第4次調査出土木製品の樹種

### 1 試料

向中野幅遺跡は、岩手県盛岡市向中野字畑返地内に所在する。試料は、南区近世以降水路跡より出土した木製品（下駄）1点である。なお、同一試料について放射性炭素年代測定が実施されており、17世紀以降の年代値が示されている（別稿年代測定報告参照）。

### 2 分析方法

試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口）、放射断面（柁目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって40～1000倍で観察した。切片をマウントクイックアクエオス（Mount-Quick “Aqueous”：大道産業）で封入し、プレパラートを作製する。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

### 3 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品はマキ属と同定され、以下に同定根拠となった特徴を記す。

#### ・マキ属 *Podocarpus* マキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行はゆるやかで、多くの樹脂細胞が散在して見られる。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。

表1 向中野幅遺跡第4次調査における樹種同定結果

試料名	遺構	層位	樹種
木製品(下駄)・ No. 5-005	南区近世以降水路跡	検出面	マキ属

### 4 考察

同定の結果、向中野幅遺跡第4次調査の下駄はマキ属であった。

マキ属にはイヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布し、暖地に分布する針葉樹である。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。マキ属は耐朽性、保存性が高く水湿に強く、やや重硬で強靱な材で、柱材などの建築部材によく利用され、また机や紡織具などにも広く利用される。マキ属は暖地の山林内や緩傾斜の適潤な場所を好み、温帯下部の暖温帯から亜熱帯に分布する極めて温暖な気候下に生育する常緑針葉樹である。

関東以西に生育する樹種であり、これまでの報告で東北地方および北海道における出土は極めて稀で、遺跡周辺地域では生育しない樹木である。なお、マキ属の中でもイヌマキはコウヤマキに似ていることからその名がつけられ、また材質もコウヤマキには劣るが良材である。水湿に強いことから屋根板、桶などに利用され下駄の用材としても適材であるが、下駄の用材にマキ属（イヌマキ）を用いる例はめずらしい。しかし、現代用材として用いられるものはマキ属の中ではイヌマキが多く、本試料はイヌマキの可能性が高い。以上のことから本試料は関東以西より流通や人の移動等によって製品が本遺跡に持ち入れられた可能性がある。

文献

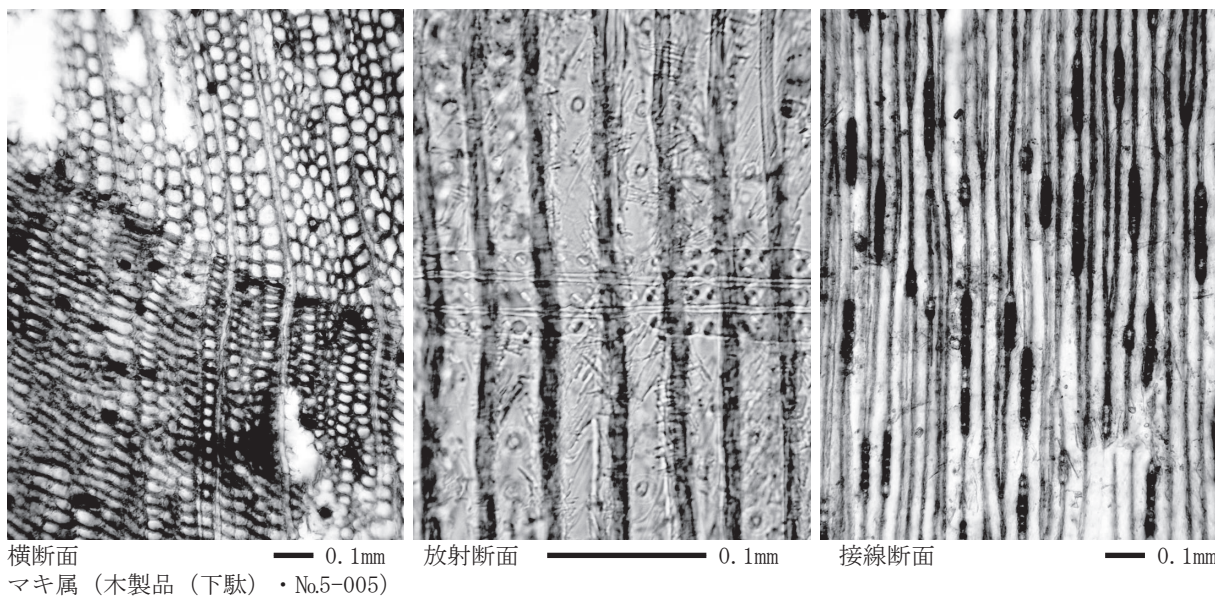
伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242.



図版1 向中野幅遺跡第4次調査の木材



樹種同定試料採取位置



## 2 出土火山灰科学分析結果

### 向中野幅遺跡第四次調査出土のテフラ分析

#### はじめに

向中野幅遺跡（岩手県盛岡市に所在）は、北上川西岸の低位段丘上に位置しており、第四次調査では溝跡などの遺構が検出されている。本分析調査では、RG02 溝跡の B 層で確認された火山灰と考えられる堆積物について、テフラの同定および火山ガラスの屈折率測定を行い、既知のテフラとの対比を行う。

#### 1 試料

試料は、北区（RG17）RG02 B 層粉状パミスサンプルとされた堆積物 1 点である。古代以降と考えられる溝跡の埋土中位 B 層から出土した。試料の外観は、肉眼で灰黄褐色を呈する砂質シルトである。

#### 2 分析方法

試料約 20g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

#### 3 結果

処理後に得られた砂分は、多量の細砂～極細砂径の火山ガラス、中量の軽石から構成される（表 1）。火山ガラスは無色透明の軽石型が多く、それよりやや少量の無色透明のバブル型、極めて微量の褐色のバブル型が混在する。軽石型には塊状および繊維束状のものが認められる。軽石は、白色で発泡やや良好～やや不良のものが混在している。

火山ガラスの屈折率測定結果を図 1 に示す。n1.505-1.509 のレンジで、モードは n1.507 付近を示す。

表 1 テフラ分析結果

試料名	スコリア	火山ガラス		軽石		
	量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
北区 (RG17) RG02 B層 粉状パミスサンプル	—	++++	cl・pm>cl・bw>>br・bw	+++	W・sg～sb	1.5

凡例 —：含まれない。+++：中量。++++：多量。

sg：やや良好。sb：やや不良。最大粒径はmm。

W：白色。

cl：無色透明。br：褐色。bw：バブル型。pm：軽石型。

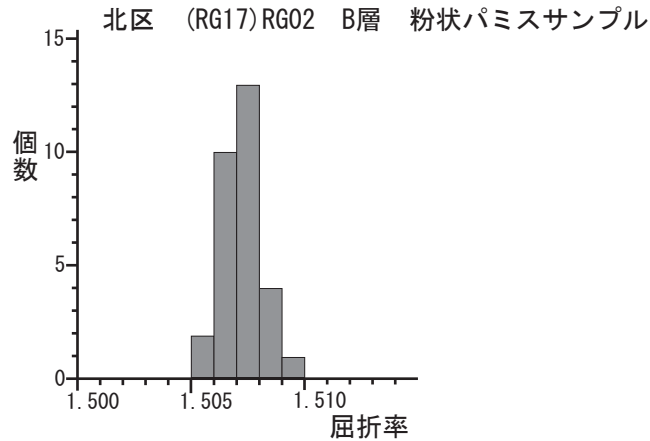


図1 火山ガラスの屈折率

#### 4 考察

試料は、軽石および火山ガラスを主体とするテフラである。軽石および火山ガラスは、その屈折率と火山ガラスの形態的特徴および向中野幅遺跡の地理的位置とから、西暦915年に十和田カルデラから噴出した十和田aテフラ (To-a: 町田ほか, 1981; 早川・小山, 1998) に由来すると考えられる。To-aは、給源の十和田カルデラ周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている (町田ほか, 1981)。

今回の試料が中量～多量の軽石および火山ガラスから構成されることから、試料が採取されたB層は、To-aの降灰層準すなわち西暦915年の層位に近いと考えることができる。

#### 文献

- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.
- 早川由紀夫・小山真人, 1998, 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日 - 十和田湖と白頭山 -. 火山, 43, 403-407.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, 562-569.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.

# 第5章 総括

## 1 調査のまとめ (第18図)

第4次調査では、縄文時代以降の溝状土坑(陥し穴)、古代以降の溝跡、土坑、近世以降の溝跡を確認した。

中区において検出した溝状の3基の土坑RD04, 05, 06は、縄文時代以降の陥し穴と考えられる。今次調査区の西方の第2次調査区において縄文時代の遺物が出土していることから、縄文時代以降の遺構と考えられるが、埋土中からの遺物の出土や火山灰の検出がなかったことから、詳細な年代は不明である。周辺の道明地区及び盛南地区の遺跡からも同様の遺構が検出されていること、低湿地の近くであることから、水場に近づく獣を捕獲するための陥し穴の土坑と推察される。

円形の土坑RD02, RD03は井戸跡と考えられる。底面から湧水が確認されたことや埋土の状況から井戸跡と考えられる。これまでの本遺跡の発掘調査では住居跡と考えられる建物跡が検出されていないことや、周辺から土器の出土が少ないこと等から、農地への灌漑のための井戸と推察される。

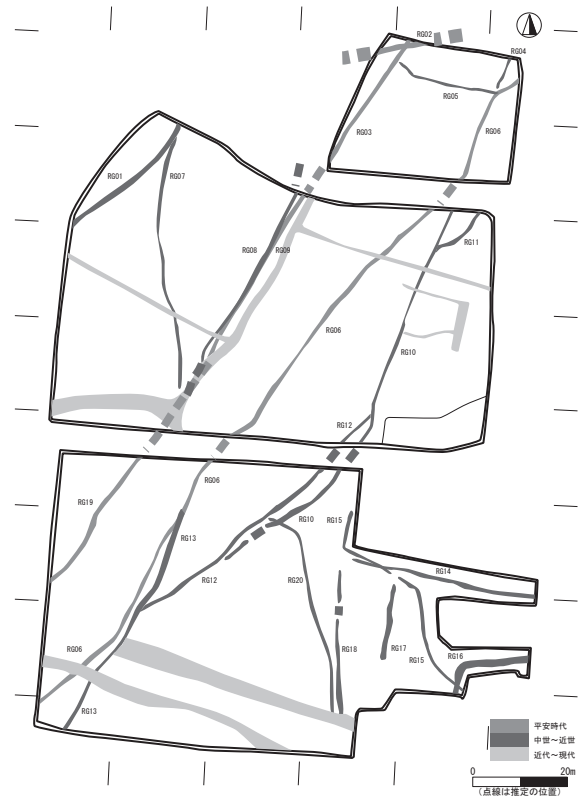
調査区内全域に溝跡を検出した。埋土状況や重複関係から、古代以降、中近世以降、近代以降に分類できる(第18図)。

近代以降のものは中区南部、南区南部において検出した水路跡(攪乱)であり、これは近世以降の古絵図や昭和23年の米軍空中写真にも確認できる農業用水路と考えられる。またこの南区の水路跡検出面から、木製品(下駄)が出土した。AMS年代測定結果から17世紀半ばから18世紀頃の下駄と考えられ(第4章参照)、上記水路の年代観とも合致する。この下駄の樹種同定分析の結果、イヌマキ材によるものとされた。東北北部には生育しない樹種であり、関東以西からの流入品の可能性が指摘された。さらに下駄の用材にマキ属を使用する例も珍しいという。下駄の来歴は、関東以西から下駄を履いた人が来たのか、下駄が流通してこの地の人が入手したものなのか等、詳細は不明としか言えないが、この地域の人々や物資の動きを示す。

中近世以降の溝跡は、調査区東寄りを南北及び東西に延びるものである。農業用水路の一部と考えられる。

古代以降の溝跡は、調査区北部から南西方向に延びる物が多い。RG02, RG06溝跡の埋土からは火山灰を検出した。分析の結果、十和田a火山灰(To-a・915年頃降下)であった(第4章参照)。RG02埋土からは、十和田火山灰の堆積した層の下層から9世紀後半以降の土器が出土しており、9世紀以降に掘られ使用されていた水路跡と考えられる。本遺跡の北東側には南仙北遺跡、北西側には細谷地遺跡など、9世紀後半代以降の集落遺跡が確認されており、水田農耕が行われていたと考えられ、その灌漑水路だったことが推察される。また本調査区の北方にこの溝が延びることから、北側隣接地に古代の集落がある可能性もあろう。

また、1点だけが縄文土器の後北式の模倣かと考えられる土器破片が出土した。第2次調査において出土した縄文時代の土器や石器の遺物包含層と同様、河川の流れにより流れ込んだ可能性が高い。



第18図 第4次調査 遺構年代模式図

以上のことから、今次調査区は、縄文時代以降は水辺に近づく獣を捕獲する狩場として活用され、稲作農耕が定着し集落が増加する9世紀後半以降現代に至るまで、稲作農耕適地として水路や井戸が掘られ、活用されてきた土地と言える。

## 2 道明堤について

既刊報告書（盛岡市教育委員会2019『向中野幅遺跡－第1・2次発掘調査（仮称）盛岡学校給食センター建設に伴う発掘調査報告書－』）において、道明堤に関する文献や古絵図、空撮写真等の調査成果を報告した。

その後さらに古絵図等を調べ、若干の知見を得られたため、既報告分とまとめて以下に報告する。

### (1) 現況（航空写真③、第1～3図版）

本遺跡北端部にあたる盛岡市向中野字幅地内には、平面形が「へ」もしくは伏せた「コ」の字状に延びる全長約280m、幅約6～10m、周辺の水田との比高差約50～100cm程度の土手状の高まりが確認できる。周囲は水田で、この高まりは主に畑地として使われている。1960～70年代の圃場整備からも除外されたようで、古くから残る。

地元では、この土手状の高まりを指して、「江戸時代に南部の殿様が鷹狩りをした道明堤の跡だ」と言い伝えられてきたという。また、昭和30年代の圃場整備前までは、あちこちから冷たい湧水が湧き、水田稲作にとって不都合があるため、あちこちに小さなため池や水路が作られていたようである。

### (2) 発掘調査成果（既刊報告書参照）

第2次発掘調査において、部分的にトレンチ（試掘溝）を設定し、土手状の高まり地形の土層断面観察を行った。その結果、現在の土手の半ばのB層から近代以降の陶磁器片やガラス破片が出土した。またB層の一部に、酸化鉄を多く含む層が確認されたことから、一時水をかぶったり水没したりした可能性が考えられる。

これらのことから、現在残存する土手状高まりの大半は、近～現代以降に積まれたものであるといえる。

また、第4次調査においては、南区南部と中区南部に近世以降の水路跡（攪乱）を確認した。南区南部の水路跡の検出面から、木製品（下駄）が出土した。

### (3) 航空写真（航空写真①～③）

国土地理院ウェブサイト上で公開されている昭和23年（1948年）5月15日の米軍撮影写真（航空写真①）、その後の水田圃場整備がされた以降の昭和37（1962）年及び昭和40年（1965年）6月12日の空中写真（航空写真②）に、土手状の地形を水田の中に確認できる。このことから、昭和30年代の圃場整備では、土手状の高まりは保存されたことがわかる。第2次調査の成果から、圃場整備の際に盛り直しがされた可能性もある。

また、昭和23年の米軍空中写真（航空写真①）において沼は確認できないが、明治5年11月（1872年）「陸中岩手郡向中野村書上絵図面」（古絵図⑤）にみえる沼の地形と思われる水田の地形や、各古絵図に見える水路の一部を比定できる。

以上から、航空写真によれば、溜池（沼）は確認できないが、江戸時代から明治初期の絵図にある水路は、昭和20年代までそのまま使われ続けたことが読み取れる。第4次発掘調査によって確認した近世以降水路跡（攪乱）の位置関係や、出土した木製品下駄の年代測定結果等とも矛盾しないものといえる。

### (4) 古絵図（古絵図写真①～⑤）

もりおか歴史文化館及び岩手県立図書館に所蔵されている近世以降の古絵図のうち、次の①～⑤のものに、畑返地内と幅地内（向中野幅遺跡の位置、現在の土手状の高まりの場所）に「土手状の高まり」、道明地内に「沼」（溜池）の表記を確認した。



## 古絵図写真

- ①「向中野通絵図面」 近世 29.3×20.7cm (折畳時) 1枚 畳もの 紙本彩色 もりおか歴史文化館蔵
- ②「岩手郡向中野村元治二年春郷村為御吟味御竿打直被仰付候御調吟味出役御勘定方廻村百間四寸積取調候分間絵図面」  
(向中野村絵図) 元治二年(1865年) 205×160cm 1枚 畳もの 紙本彩色 制作 豊川平治, 大江伝左衛門, 中島千五郎, 松田助五郎 岩手県立図書館蔵
- ③「岩手郡向中野村図 壱町六分」 明治前期 49×53cm 1枚 畳もの 紙本彩色 岩手県立図書館蔵
- ④「岩手県管轄陸中岩手郡向中野村絵図 壱町六分」 明治前期 1枚 畳もの 紙本彩色 岩手県立図書館蔵
- ⑤「陸中岩手郡向中野村書上絵図面」 明治五年壬申十一月(1872年) 327×264cm 1枚 畳もの 紙本彩色 制作 副区長 昆伊兵衛, 戸長 佐藤勘兵衛, 副戸長 鈴木與右衛門, 百姓代 鈴木市之助, 鈴木與十郎 岩手県立図書館蔵

近世期に作成されたとされる①「向中野通絵図面」には、畑返地内に土手状の高まりの地形や溜池の表現は見つけられない。しかし、道明地内には、小さな溜池とそこから東に延びる水路の表現を見ることができる。

幕末の元治2年(1865年)の記述のある②「岩手郡向中野村元治二年春郷村為御吟味御竿打直被仰付候御調吟味出役御勘定方廻村百間四寸積取調候分間絵図面」(向中野村絵図)には、畑返及び幅地内に「コ」の字を伏せたような平面形で、土手状の地形表現が確認できる。その南には、東西に延びる水路が見える。西方の道明地内には、水路の始点部分にかろうじて小さな溜め池かと思われる表現を見ることができる。

明治前期に作成されたとされる③「岩手郡向中野村図 壱町六分」及び④「岩手県管轄陸中岩手郡向中野村絵図 壱町六分」には、畑返地内の堤状の高まりの東辺部と推測される地形が「野」として表現されている。西方の道明地内には溜池の表現は無いが、東西に延びる水路は、それ以前の絵図と同じように表現されている。

明治5年11月(1872年)に作成されたとされる⑤「陸中岩手郡向中野村書上絵図面」には、詳細な地割とともに、畑返地内には「野」として堤状の高まりの地形、西方の道明地内には「沼」、東西に延びる水路の表現が確認できる。

以上から、畑返地内の土手状の高まりの地形や道明地区の溜池は、少なくとも江戸時代後期以降は存在していたといえる。道明地区の溜池は、近世期における大きさの変化はあるにしても、明治初期には存在していたと推測される。

## (5) 文献 (文献①～⑤)

『南部藩御当家御記録』「八(元和)」(文献①)によれば、元和5年(1619年)に南部利直(盛岡藩2代藩主)が、徳川秀忠(徳川幕府2代将軍)から拝領した鉄砲<sup>(注1)</sup>で、道明堤にて白鳥を撃ち、それを将軍に献上したところ将軍はご満悦だったという記録がある。この道明堤は、向中野通内にあると記されている。この話は、御当家御記録を記した平沢親常が、40～50年前に御祐筆書頭照井善右衛門から伝え聞いたものである、と記されている。

太田村誌『朝暉に額づく・太田村誌』によれば、蟹沢家の天保11(1840)年の萬覚書帳「定目飯岡通御官所諸控」に、飯岡通の供出する諸普請について記載があり、「一、向中野通 道明堤、小鷹堤、新堤、細工堤、湯坪堤、間渡堤、油田堤、メ七ヶ所」とある。このことから、盛岡五代官割合のほか、飯岡通代官所管内が管理する堤のひとつに道明堤があげられていたことがわかる。

「盛岡藩家老席日誌『雑書』」は、現在44巻まで翻刻刊行されている。向中野通、堤、堤普請などの記述を探し、文献②～⑤を確認できた。文献②～⑤以外にも、鷹野(鷹狩り)の場所として、しばしば向中野は散見される。

このことから、江戸時代の向中野通道明地区には、盛岡藩が幕府へ鳥を献上する鳥討ちのための鳥溜りとして利用された「道明堤」という沼(溜池)があったことは間違いない。そして、文献上に見えるこの「道明堤」は、現存する土手状の地形の場所ではなく、古絵図中に見える「沼」を指していたものと推察できる。『雑書』

にあるように、枯渇することもあり、絵図に表記されていない場合もあったものと考えられる。明治初期以降は、そのほかの数多くの堤のように、農地化されたものと推察される。

#### (6) まとめ

向中野字畑返及び字幅地内の土手状の高まりは、江戸時代に道明堤と呼ばれた溜池の一部であるかどうかの確証は得られなかった。しかし、少なくとも江戸時代末期から明治時代初期以降、現在に至るまでは、積みなおされながらも、同じ場所に土手状の高まりが存在し続けたことがわかった。

文献において確認できる道明堤は、古絵図より明治時代初期まで道明地区にあった溜池と考えられる。絵図によって溜池の表現があつたり無かつたりする。これは、その作者が記録したい内容によって沼や水路、土地利用などの表記が異なることから表記を省略したものか、または雑書にみられるように、枯渇した時期に作られた絵図で記されなかったことなどが考えられる。

御当家御記録には「向中野通之内有古跡也」と表記されている。この「古跡」の解釈によって、意味が変わってくる。すなわち、「殿様が鳥撃ちをしたという言い伝えのある古跡」という意味であればその当ても沼が存在したと考えられる。もしくは「沼があつた古い跡がある」という意味であれば、以前は沼があつたのに今は無いと解釈できよう。

また、『増補行程記』の三本柳の場所には、「かつて大沼という堤があつたが開田農地化された」趣旨の記載があるが、向中野周辺、道明地区や畑返地区内には、そのような記載は見つけられない。また、『増補行程記』の西津志田村と向中野村の境界付近には、「小土手有」の表記が見える。おおよその位置関係ではあるが、これが土手状の高まりを表現している可能性もあるが、位置関係上その可能性は低いだろう。

なお、『雑書』(文献⑤)に見える「小鷹堤」は、『増補行程記』に見える「小沼」の表記や、そのほかの絵図に見える小鷹地内の沼の表記と考えられる。これは現在の仙北3丁目付近に該当すると推察される。古絵図に見える水路の一部は現存するものと考えられるが、この小鷹堤そのものは、昭和23年の米軍空中写真からも確認できず、現存しない。

以上のことから、向中野幅遺跡北辺の土手状の高まりが、いつ頃、何の意図によって作られたものなのかは判明できなかった。また、近世期をとおして鳥溜りや水利施設としての道明堤は、おそらく道明地内の水路の始点部に作られた溜め池だったと推察される。

しかし、土手状の高まりは、この地域住民が何らかの意図をもって大規模圃場整備からも除外し存続させ続けてきた地形であり、この地独特の個性的な歴史といえる。

今後、周辺の宅地開発で姿を消すと思われるが、その記憶とこの記録が語り継がれば、新しく住む住民にとっても地域理解の一助になるのではないだろうか。(今野公顕)

(注1) この鉄砲は、岩手県指定有形文化財の「前装式火縄銃(差取棹鉄砲 さいとりざおてっぽう)」と考えられる。当時の有名な砲術家である稲富祐直の作。徳川家康の愛蔵品であつたものを、徳川秀忠が南部利直に授けたものと伝わる。銃身が長いことと、「差取棹」とは鳥もちを付けて鳥を捕る竿のことであることから、遠方から鳥を撃つ獵銃と考えられる。代々南部家家宝として伝来。もりおか歴史文化館所蔵。

#### 【参考文献】

- ・奥羽史談会 1975 『南部藩 御当家御記録』 監修 田中喜多美 編集 吉田義昭 富士屋印刷所
- ・盛岡市教育委員会・盛岡市中央公民館編 『盛岡藩家老席日誌 雑書』 各巻 熊谷印刷・東洋書院
- ・太田村誌編纂委員編 1935 『朝暎に額づく・太田村誌』 太田村
- ・福田武雄編著 1974 『農民生活変遷中心の滝沢村誌』 滝沢村
- ・細井計編 1999 『奥州道中増補行程記』 東洋書院
- ・国土地理院ウェブサイト 地図・空中写真閲覧サービス 各空中写真
- ・盛岡市教育委員会 2008 『もりおかの文化財』

(文献①) 南部藩 御当家御記録

御当家御記録 八(元和)

元和五(1619) 巳未年 三月十日

御老中土井大炊頭殿より御奉書之写を此処江認入ケ様ニ不仕候而ハ御文言と申御国持之御方茂御同意ニ御座候御儀往古之御次第等不相知候依之謹而奉調候

左之通

利直様御拝領之御鉄炮ニ而白鳥を御打被遊候御場所ハ道明堤ニ而之事ニ候上様江被献之候処御満悦之旨申来之

利直様御参勤之度毎 將軍様御鷹野御供被仰付御供被成候或時其方身軽歩行自由御覽被遊其着用を御所望ニよつて仕立申付献上仕候由

此段ハ四五十年前以前御祐筆書頭照井善右門と申老人之咄之由其老人ものゝ伝聞慥なる義と仮ニ載之

道明堤ハ 向中野通之内

有古跡也

盛岡藩家老席日誌 雜書

(文献②) 安永十年(1781) 三月 三ノ十五日 晴

一 向中野道明御堤、矢巾通新田御堤、近年殊之外濶申候て水溜り無之、献上御鳥討御用之節、右故御用相立不申候程ニ罷成候、尤濶

候上へ水為持候得は御堤端御田地水溢、苜仕廻等ニ御百姓共甚迷惑仕候段申二付、此儀も難申上候、依之半浚ニ被3仰付候得は、水溜り宜御田地へも障不申御献上御用ニ相立可申旨、御鳥見申出候、願之通御用人中へ申渡之、

(文献③) 寛政四年(1792) 閏二月 閏二月朔日 晴

一 御鳥見共願出候は、預場所向中野村道明御堤、近年殊之外濶候て水溜り無之、御献上御鳥討御用之節御用相立不申候、依浚御普請被 仰付候様仕度之旨申出、願之通御用人中へ申渡之、

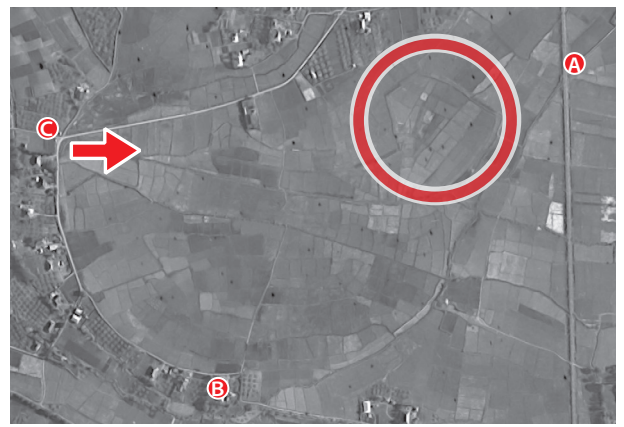
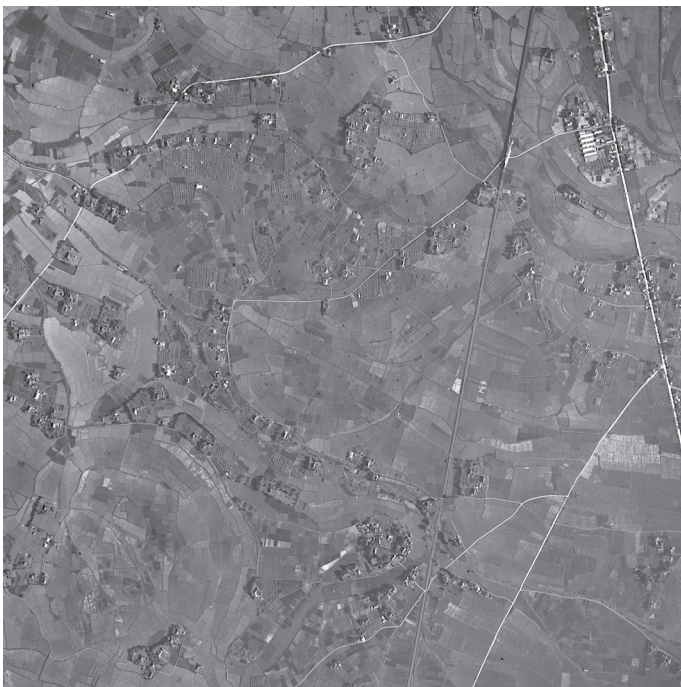
(文献④) 寛政四年(1792) 閏二ノ十五日 晴

一 向中野通御代官所之内道明堤、御鳥溜御普請被 仰付候処、五御代官所より人足出働之儀、最早田打時節ニも至甚迷惑仕候間御延被成下度旨、五御代官所御百姓共願出、御元締・御勘定頭為遂吟味、願之通御勘定頭へ申渡、御用人中へも右之趣口達ニて為申知之、

(文献⑤) 文化八年(1811) 三月 三ノ廿七日 晴

一 向中野通中村村御鳥溜道明堤、并仙北町村小鷹堤後御普請之儀、御鳥見申出其筋為遂吟味候処、小鷹堤水門朽損候二付、水門計御取替、道明堤ハ後御普請被 仰付、出人足三千七百三拾四人、前例之通五御代官所懸可被 仰付哉と御勘定頭共申出、伺之通申渡御用人中へ申渡之、

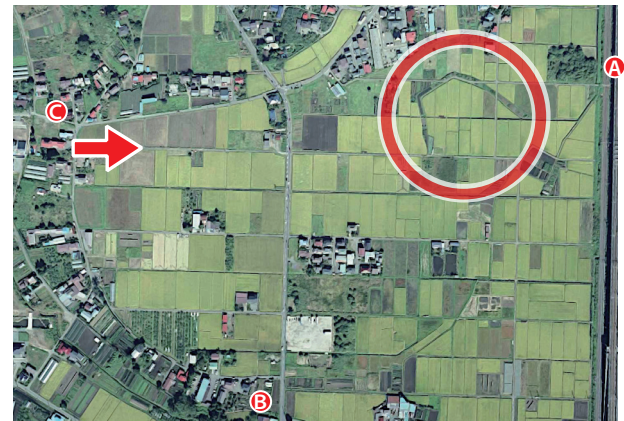




①: 1948/05/15 (昭和 23年) 米軍撮影  
土手状高まりが確認できる。古絵図⑤と比較すると沼の位置が推定できる。



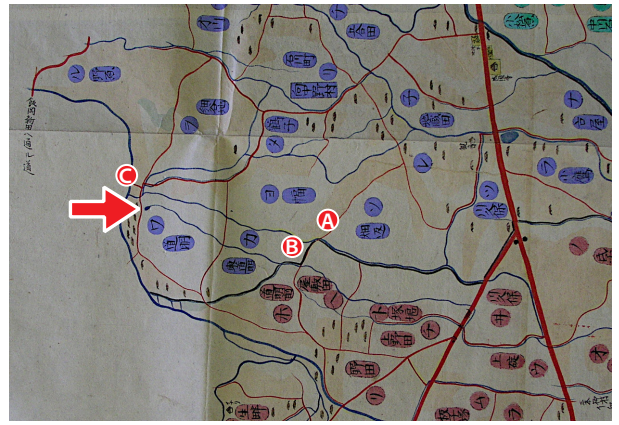
②: 1965/06/12 (昭和 40年) 撮影  
土手状高まりが確認できる。昭和 30年代に圃場整備が実施され、現在の姿に近づき、旧地形が見えなくなった。



③: 2008/09/30 (平成 20年) 撮影  
土手状高まりが確認できる。周辺は盛南開発により環境が様変わりしている。

注：写真は国土地理院ウェブサイト「地図・空中写真閲覧サービス」からダウンロードし、トリミング調整をしたものである。右側の写真は部分拡大し各記号等を加筆した。矢印は沼と考えられる地点、○は土手状高まり、a b cは古絵図(1)(2)と同じ場所と推測される地点を示した。





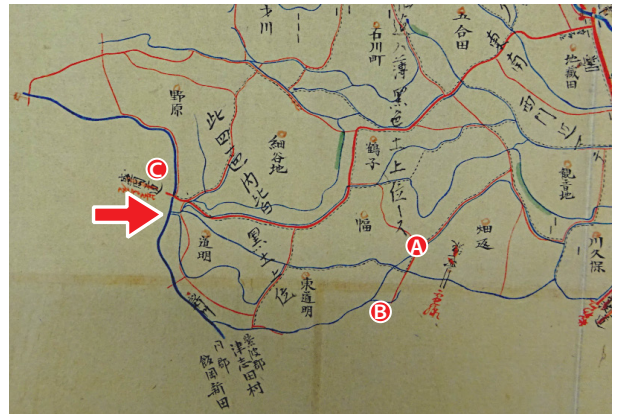
①『向中野通絵図』（江戸時代）（もりおか歴史文化館蔵）  
道明地内に沼が表現されている。



②『岩手郡向中野村元治二年春郷村為御吟味御竿打直被仰付候砌御調吟味出役御勘定方廻村百間四寸積取調候分間絵図面（向中野村絵図）』（元治2年1865年・幕末）（岩手県立図書館蔵）  
道明地内に沼，幅地内に土手状高まりが表現されている。



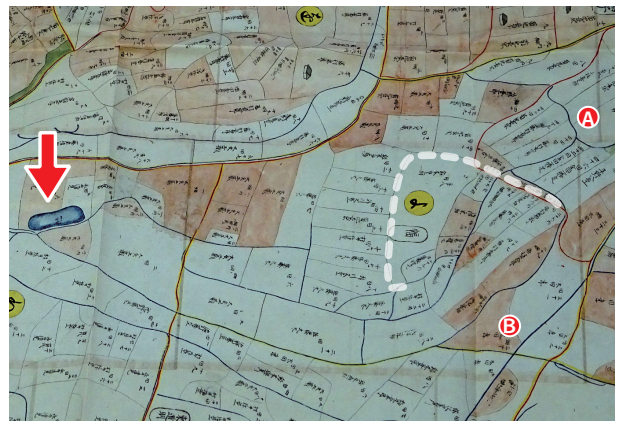
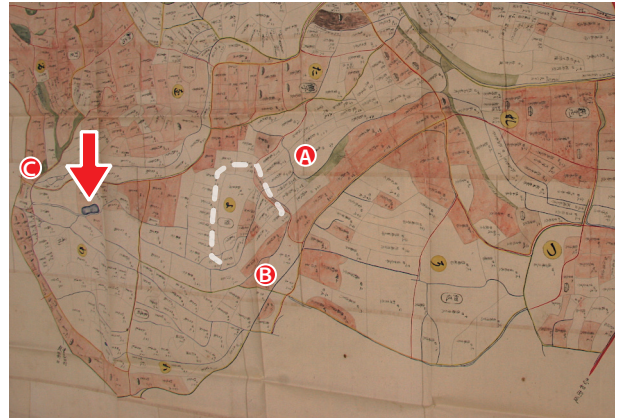
③『岩手郡向中野村絵図 壹町六分』（明治前期）（岩手県立図書館蔵）  
道明地内に小さな池の表現が見える。④とほぼ同じ内容で朱書き訂正を反映した清書か？



④『岩手県管轄陸中国岩手郡向中野村絵図 壹町六分』（明治前期）（岩手県立図書館蔵）  
③と地形や水路等は同じ。朱書き訂正が③に反映されている。

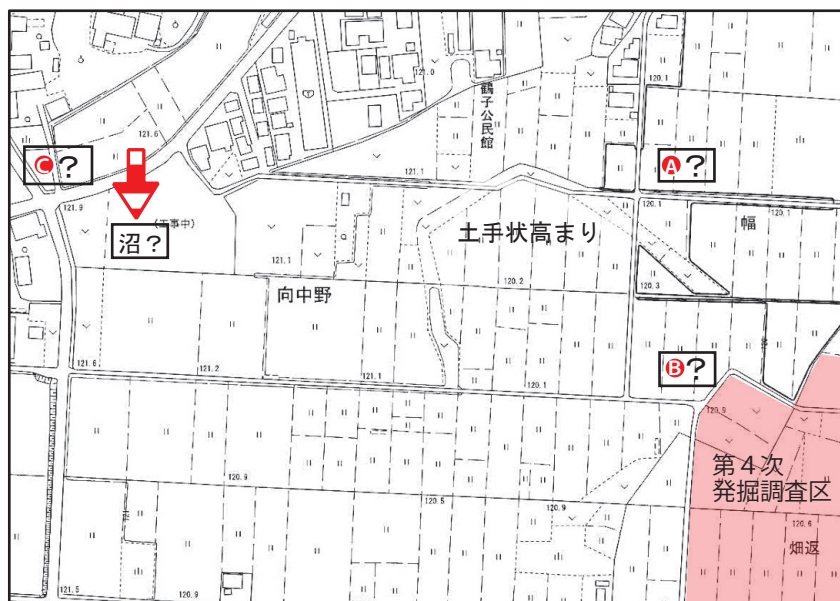
注：左側は各図の全景。右側は部分拡大。図中の矢印及び○印は加筆。  
矢印は沼や土手状高まりと考えられる表現，○は同じ場所を表現したと考えられる部分を示した。





⑤『陸中岩手郡向中野村書上絵図面』明治五年壬申十一月』（明治5年・1872年）（岩手県立図書館蔵）  
 今回調査した絵図のうち、道明地内の沼が最も大きく描かれている。土手状高まりは描かれていないが、位置は地割りや水路から推定できる。周囲には地権者名と思われる名前が記されている。

注：左上は全景、ほかは部分拡大。図中の矢印及び○印、土手状高まり推定線は加筆した。  
 矢印は沼や土手状高まりと考えられる表現、a b cは同じ場所を表現したと考えられる部分を示した。



【参考】現況図（都市計画図に加筆）  
 昭和30年代に圃場整備されたが、土手状の高まりが残存。沼は残存しないが、水路や道路形状等から、明治5年絵図の沼の場所を推測した（図中の沼?）。





盛岡南新都市区画整理事業区域（白線）・道明地区区画整理事業区域（変更前・赤線）（南東から）



盛岡南新都市区画整理事業区域（黄線）・道明地区区画整理事業区域（変更前・赤線）（垂直）





S=1/800  
(1/200 オルソ画像を 25%縮小)





第4次調査区 全景（南から）



第4次調査区 全景（北西から）  
（点線範囲が残存する土手状高まりの南東端部）





RD01 土坑



RD03 土坑



RD02 土坑



RD02 土坑 断面



RD04 土坑



RD04 土坑 断面



RD05 土坑



RD05 土坑 断面





RD06 土坑



RD06 土坑 断面



RG07, 01 溝跡 (北から)



RG02 溝跡 (南西から)



RG02 溝跡 B層上面火山灰検出状況



RG03 溝跡 (南から)



RG04, 05, 06 溝跡 (北から)

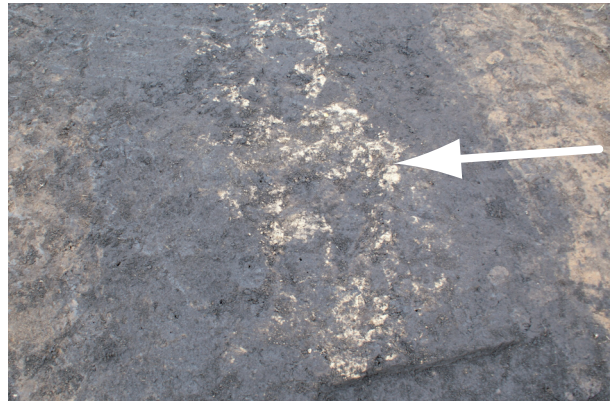


RG08, 09 溝跡 (北から)





中区 RG10 溝跡 (南から)



中区 RG10 溝跡 A層火山灰検出状況



南区 RG10 溝跡 (南西から)



南区 RG13, 11 溝跡 (南から)



RG15 溝跡 (西から)



RG16 溝跡 (北西から)



RG17 溝跡 (西から)



RG18 溝跡 (南から)





RG20, 19 溝跡 (南から)



RG21 溝跡 (南から)



作業員



表土除去



排水作業



作業風景







1 あかやき土器 坏  
RG02 C層



2 土師器 坏  
RG02 B層



3 須恵器 甕  
RG02 B層



4 弥生土器  
南区 検出面



5 木製品 下駄  
南区 南部攪乱 (近～現代水路) 検出面



6 ガラス瓶 (近～現代・蜜柑水瓶)  
中区 検出面

# 報告書 抄録

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	むかいなかのはばいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書 名	向中野幅遺跡発掘調査報告書							
副 書 名	第3・4次調査 盛岡市新産業等用地整備事業に伴う発掘調査報告書							
編著者名	今野公顕							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館（発行：盛岡市・盛岡市教育委員会）							
所 在 地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1 電話 019-635-6600							
発行年月日	2019 年 9 月 30 日							
ふりがな 所収遺跡名 (略号)	ふりがな 所在地	コード		北緯・東経		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むかいなかのはば 向中野幅 (OMH)	いわてけん 岩手県 もりおかしむかいなかの 盛岡市向中野 あざはばあざはたがえし 字幅・字畑返	03201	LE 26-0371	39° 40' 17"	141° 8' 45"	第3次 2017.11.21～ 2017.12.06 第4次 2018.07.09～ 2018.09.28	2,568.0 10,846.5	盛岡市 新産業等用地 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
向中野幅遺跡 3次(試掘) 4次(本調査)	集落	縄文時代以降 平安時代以降		土坑 溝跡・土坑		<ul style="list-style-type: none"> <li>弥生時代 土器</li> <li>平安時代 土器 (土師器, 須恵器, あかやき土器)</li> <li>近世以降 陶磁器 木製品(下駄)</li> <li>近代以降 ガラス瓶, 陶磁器片</li> </ul>		
要 約	<p>本遺跡周辺には、古代から中～近世の遺跡が数多く分布する。これら「盛南地区遺跡群」は、平安時代初頭の延暦22年(803)に、政府が造営した古代城柵「志波城」の南東方に位置する。これまでの発掘調査で、7世紀から10世紀頃まで「志波蝦夷(エミシ)」が拠点とした古代集落群や、中～近世の居館跡、集落跡等が確認されている。</p> <p>向中野幅遺跡は、盛南地区遺跡群の南東端に位置し、古代の集落や、近世のため池跡(道明堤)があったと考えられている。</p> <p>本発掘調査では、近世のため池や鳥溜りの「道明堤」の跡とされていた本遺跡周辺が、発掘調査の結果、縄文時代及び古代以降現代まで狩場や農地として使われてきた場所と考えられるという成果とともに、古絵図等の調査から「道明堤」は本遺跡よりも西方にあった可能性が考えられる成果があがった。</p>							



---

---

## 向中野幅遺跡 発掘調査報告書

—第3・4次調査 盛岡市新産業等用地整備事業に伴う発掘調査報告書—

令和元年(2019年)9月30日

編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館  
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1  
TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605  
E-mail iseki@city.morioka.iwate.jp

発行 盛岡市・盛岡市教育委員会

印刷 永代印刷 株式会社  
〒020-0857 岩手県盛岡市北飯岡一丁目8-30

---

---